第五百十九號目次

◎社　說
日本教育の痛憂事
　檄して同感同憂の人士に寄す
靜平たる山林

◎隨　感
鎭守の森◎我を措ての人世觀◎人世僥倖なし◎商道◎白雲の郷◎唯ひとり倡たれ

◎女　學
繼母の地位
料理鹽梅の道
理想の男子(三)……………生田正起

◎光瀾之觀
記錄……………新井奧邃

◎雜　錄
花子のなげき(上)……………故中島湘烟女史
合監の四ケ月……………靑柳有美
ゲーテとカーライル……………新渡戸稻造君
定見深睡錄
痴情僞語……………一愛讀者(投)
宇宙と人生及靈魂に就て……………黑岩周六君

◎時　事
雄辨の世再び來れり◎雄辨の基礎◎基督教の公認◎佛教一進化せり◎神道界は奈何ん◎當年の宗教家懇談會◎三教一家

第五百十八號(七月廿五日)目次

◎社說　無意識論(無我、無心、無念、無想、自得、大悟、至誠、及び神に入り妙に造するの境界◎武術流行の機運(女學校の薙刀科)

◎隨感　執拗き暑さ◎一陣の淸風◎夕ぐれの凱旋◎拂曉戰鬪の準備◎道の案内◎源平盛衰◎小松殿の苦衷

◎女學　文明風家庭の破壞◎故齋藤冬子の日記文

◎光瀾之觀　記錄(奧邃)不我の言(一、二)。

◎雜錄　排女役者(有美)◎田舍(黑光)◎陣營新嘯(鷗村)◎追懷(柳子)◎東山老翁の勝海舟談◎平言凡語(有美)◎獨嘯錄(無美)

◎時事　夏休中の女學生◎成功のおしへ◎信川の代現◎樂しき旅行◎洋樂の流行◎避暑のあそび

◎寄書　曉らぬめぐみ(信陽一女)

第五百十七號(七月十日)目次

◎社說　自由、平等、博愛の三標語◎「國家の爲」虛僞の辨◉大政一發の感(附勝安房維新の建白)◉女學冒頭の輕斷者

◎隨感　巖頭の感◎戰には戰死者ある也◉汽車走らず◉若王寺山上雨后の景◉雅道◉神秘默契

◎女學　昔の女學◉理想の男子◉女子の中等教育程度に於る英語の研究(山形東根)

◎光瀾の觀　花觀の釋並に道棲の譯○英文隨感◉記錄(新井奧邃)

◎雜錄　近視結婚有害の哲理(靑柳有美)◉年少哲學者を吊ふ(西内天行)◉白百合(左琴女)◉琴城先生を挽す

◎寄書　靑柳有美氏の美極經濟論(一生)

期日	前金		廣告料		送金
毎月二回(十日、二十五日)發行す	壹冊定價 拾錢 半年分前金 壹圓拾錢 一年分同 貳圓	代金は總して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共何等の御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し◎追て請求可致事是れ甚だ不本意ながら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	一行(十七字詰)一回 前金拾錢 一段 同 三圓半 一頁(三段) 同 九圓		送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

大賣捌
東京 東京堂
西京 勉強堂
大阪 文淵堂

明治三十六年八月十日印刷
明治三十六年八月十日發行

發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
發行所 東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地 女學雜誌社 (特電番町千一番)
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍 (電話新橋十八番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十六年八月十日發兌

第五百拾九號

社説

日本教育の痛憂事

檄して同感同憂の人士に寄す

教育と申す事は如何なる世に於ても心配に堪へぬものにて、人の父母たる輩は云ふに及ばず、苟くも當代人事の盛衰に心がくる程の人々は、曾て其の公心を刺激して、此の一大問題に念ひを掛けたるとの無からんものは、未だあらじとこそ思はれ候。

今日産聲をあげたる呱々たる赤兒が二十三十の成人となるはなか〳〵容易ならぬ事の樣にも思はるれど、眞とは雜作もなき迅速のものに候。日清戰爭と申せば、昨日の事の樣にも思はるれど、其頃に生れたる子供は早や十歳前後とも相成るべく、又明治十年の西郷先生のイクサと云はば、吾々には至つて興味ある近き出來事に思はれ候得共、今の中學もしくは高等學校乃至、高等女學校などに居らるる學生に話し見れば、矢張り生れぬサキの古事としか聞取られず候。歳月の流れ去つて、少年の白髮となり來る經過は、存外にも手早きもの故十年二十年とかゝる教育は、至つて緩漫なるものの樣にも思はるれど、實は至つて速やかなるものに候。

さすれば、此の教育を善くして、人間を子供の時より立派に造り上げ、其土臺を丈夫にして、此の基礎の上に萬事を建設する樣に致さんとは、眞面目に人事を心配する族のミナ掛念する所ろなるべく候。然るに、教育果して左程の好結果を奏したると、古今に於て實例これあり候乎。先以て嚴そかに思念すべき先決の疑題にて候。

古しへのスクールは、別段校舍などを設置致さず、山河のほとり、樹林のかげ、ミナ門生の集まりて道を聞く所ろにて候ひき。かゝる時代の學校より、方今のペンキ、煉瓦の學校に至

る迄、凡そスクールと申すべき一定の團躰校舍より、所謂ゆる人才なるものを多く輩出せしめたるとの有之候乎。中々容易ならぬ問題にて候。

尤とも、一代傑出の人才が、かゝる塲所を經過して世に出でたる例しは無きに候はねど、こはたゞ其のスクールを經過したる迄の事に有之、實際、其の塲所にて敎育せられたるおかげを以て、夫丈の人物となりたりと思はるゝ證跡は、至つて覺束なく見え申候。

第一には、時代時勢の流韻とも申すべきもの有之候て、人生は必要の時節に必要の人才を輩出せしめ候。夫故、學校より人才の出でたる頃ほひには、學校以外の實際世間よりも亦た劣らざるほどの人才輩出いたし候。申さば、人の手によりて敎化せられたる跡方は至つて少なく、社會自身、當人自身の經過によりて、人才は世に出でたる樣に見うけられ候。左すれば、敎育、即はち人の手をかけて人の子を敎育するソノ敎育なるものゝ價値は如何ほどのもの乎。其邊とくと計算せねばならぬことにて候。

然るに、學校先生などは至つて好人物のものにて、つね〲太平樂ばかり申しなれ、人は敎育によつて泥細工の人形の如く自由に出來上るものと言ひふらし、天下の人才はミナ敎育家と學校との狹き門戸より輩出するものゝ樣に公告するが常にて候。然し之はちと氣恥かしき申條にて、心ある人より聞かば、滑稽ものか、馬鹿ものかとも見ゆらん樣に感ぜられ候義に候。

凡そ學校なるものを理想的に考へ候てさへ、かゝる價格のものに候處。方今我國の學校敎育などは、尙々下等の成行きに陷いり、殆んど採るにも足らざる程の始末と相成り居候。學校の數、生徒の數、學科の組織、器械の整頓などは、日ましに進步する樣に見うけ候得共、之を高尙なる方面より見下しては、彼等が人間たる大道をどれ程學び得る乎と問ひを起し又、實際の方面より觀察しては、彼等が學ぶ所ろ、如何程の活用を爲す生命ありやと、考がへ候得ば、兩つ乍ら同もに失望の事に有之、明治方今の敎育は、寧ろ幕府時代の敎育にすら劣れりと迄に慷歎せられ候。

夫を何故と申すに、幕府時代に在りては、人に人たるの大道を敎ゆると、信切に且つ有力に有之、敎ゆるものゝ道を尊と

ぶ心構へ、敎へらるゝ人の之を尊奉する態度、嚴そかなるのにて候ひし。又、其の實用の點より申さば、武家の男兒が擊劍を學び、町家百姓の子が、日用の仕事を學ぶとも、又、其の女の兒等が、家政庖厨の實藝を學ぶとも、ミナ直ちに實用を爲したるものに候。然るに、明治聖代の今日に於ては、道を重んずるとも古へに及ばず、實用に應ずるとも古へに及ばず、たゞ〳〵學ぶ所は、儀式、外形のつくり事斗りに候。然るを察せず、敎育日に隆盛なりなど、公言する人の有之候は、そも何を夢みての妄言にて候らん、笑止千萬の事に候。第一、何故に今の如く長く學校に居らねばならぬ乎。又、何故に今の如く多く學資を使はねばならぬ乎。又、何故に、今の如く多くの學科をチョイ〳〵と學ばねばならぬ乎。學校の設備なるものと見候ても、何故、かゝる大建築を必要といたし候乎。又、何故に、學校衛生などと申す面倒の事斗り言ひ立て、益もなき養生論を喧ましくせられ候乎。倫理、心理、などと申す學科は、何の益を爲しつゝありや。哲學は、何を敎へつゝありや。女學校は、女の品性をつくりつゝありや、又は破りつゝありや、男學校は、大丈夫をつくりつゝありや又は下郞、弱虫をづくりつゝありや。學校のおかげにて、日本の人格と、富とは增しつゝありや。よしんば貧乏になりたりとて、人間が立派にならば暫らく恕すべしとも言はれ得るヿに候得共、人間の品位も下り、富も亦た下り、何の甲斐なき下落ばかりいたし候ヿ、返々すも、悲歎の事に候はずや。夫故、今に方りては、敎育問題と云ふは、非常なる大問題にて候。一代の痛弊を達觀し、其の病根を直すヿが、敎育者の大經綸に候處、今は社會に對してかゝる働らきの出來ざるヿは勿論、敎育界それ自身の痛弊を改革するヿすら、容易ならぬ義に候。左すれば、今こそ敎育者が胸をいため、心をしぼりて、一大工夫を案ずべき場合に有之、ウカ〳〵敎育隆盛などとうかれ居る場合には無之候。凡そ弊の尤とも盛んなる時は、その事業の尤とも隆盛なる時にて候。今日、敎育の甚はだ盛んに見ゆるが、即はち其の實弊の絕頂に達したる一つの證據にて、識者は此の際を最とも痛心の場合と致し候。

願はくは、敎育界の同志諸君。生徒の數の大いに增し、學校經濟の樂になり、世間同情の盛んに加はる此秋に安心せず、眞想を觀、實利を考へ、遠大に潛念工夫して、物の根抵に着

眼せられんとを。左すれば、一大痛恨事の足下より既に爆發せんとするとに心づき、もろともに眼前の問題に思慮をめぐらさるべくと存ぜられ候。吾等不肖の輩も、些さか同憂の列びに尾き、多少研究せる愚案を追々申上べくと存候。

蔚乎たる山林

私がもしも、日本文明史を簡短に書く時は、之を三章に分ける積りである。第一章は、地文。第二章は、山林。第三章は帝室。この三章を書いたらば、日本文明の特色は、直ちに明白になると信じて居る。

夫故、日本の山林と云ふとを考がへるのは、單に殖產興業の上から斗り着眼するのでは無い、從來に於ても又將來に於ても、日本人種の特色なるものは、山林によつて其の三分一を養成せられ又維持せられると信ずる柄の事である。

山林荒廢して、山先づはげ、次に流れ去らば、日本は平地となるのである。海も淺くなり、水產も一變するのである。而して、日本人種を陶造したる風光の明媚、天候の晴朗、月夜の物の哀れは、ミナ消失するのである。

昔しは、世が開けずして山林を保殘した。幕府時代には、列侯對立の上からして之を大事にした。無論立國の上より大いに達觀した人などは無つた。熊澤蕃山翁は識見家である故、衆に先んじて山林の事に注目はしたが、之も矢張り經濟論が多かつた。然し今日と爲つて考がへれば、經濟以上の眼光に照らして、篤と思案せねばならぬとが、多くあるとと思はれる。

但し經濟の一點から考がへても、山林の事は大問題である。今の山林論は、たゞ山林の事を主として言はれる樣であるが吾々の目から見ては、山林は、其の樹木よりも寧ろ瀧が將來の大問題であると思つて居る。

瀧の水力電氣。コレガ將來の大事である。たゞ水力電氣の活用は、平原平野の西洋に於ては、まだ餘り廣く行はれぬなれども。日本は眞に水力電氣利用の理想國である。山と山とが近くして、都はたゞ谷の間に出來たものである。瀧から引いた水力電氣は、日本に於ては消散すると少くして多く利用さるるとが出來るのである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

石炭は迚も用いられぬ。又、用いたくない。日本の特色と、世界の樂園を汚すものは、石炭である。而して、之に代るものは、鬱乎たる山林より生じ來る電氣力である。

故に、山林の繁茂は、種々の國家問題の大元因と爲るものである。國民の氣性も、日本の風景も、狹き國を區劃して多大の特色を生ずるのも、水產の繁殖も、工業の進步も、ミナ山林の繁茂より來るのである。

工業の一事に付て附言するが、日本將來の大工業の一は、樹木に細工をして世界に賣出すことである。日本の樹木は材木として輸出せず、細工物にして輸出すべきである。即ち、麥のまゝで賣らず、豕につくり、乾豕につくりて賣ると云ふ經濟論の筆法である。

今や盛夏の候、四方に漫遊するもの多くあらん。眼こをあげて、四方の山林を見よ。かれが冠は青きや否や。白雲其上にたゞよふや否や。黑烏、細鳥は、之れにねぐらするや否や。試ろみに、健脚を運んで、所々の山上に遊べ。もし、松栢の森々たる、清流の淙涓たるものあらば、感謝して祝福を與へよ。古人吟じて言ふ、鬱乎として蒼々と。冀くは、四方、我愛する山林山林。汝は、ジョンブライトと同もに、帝王の前にだに、其の帽を脫する莫れ。

隨感

○鎭守の森

都會紅塵の氣に吸ひあき、青山白水の里に遊ばんずるもの、取わけ故國里村の光景を慕ひつゝゆく輩には、既に川を渡つて年少遊樂の境に入りてより、物々懷昔の種ならぬはなし。されど、就中床しきは、鎭守の森のかげ哉。赤き鳥居の松の間だより見え初むれば、身は既に當年の幼な兒となれり。朝たには、此處に日輪の登るをながめ、夕べにはねぐらに騷ぐ鳥をかぞへ、お祭り每に太鼓の音をきゝ、夏は木の下にすゞみ、秋は虫を尋ねしなど、宛がら昨遊の樂しみの如し。夫れ鎭守は、一地方英雄の祠の跡なり、或ひは殖產興業の爲に、もしくは、救荒治疫の爲に、該地一代の災ひを救ひ、則はち

死して光德を紀念せられたる名殘にあらざるは稀なり。祝福自からこもり、恩化必らず含む、一地方民心の懸る所、永久に此處に存すべしとも思はるれば、單に舊時迷信の宿とのみ觀せず、公園倶樂部の今時の趣構をも之に加へて、長久へに鄕人のゆかしさをこめよ。鎭守の神を重んずるは、即はち英雄の崇拜なり。

○我を措ての人生觀

他のつれなさをかこちて人生觀を立るほど、私慾なるはあらじ。人生觀は、己が心を種としてぞ立つべきなれ。我に聖俗二つの念ひあり、利他、利己の情感亦列び存す。其の何れにか、趨らんとするもの、唯だ時の機、世のもてなし如何んに由ることを省みば、他の我に對するよしあしなど、本來、我にありて彼に非ずとこそ思ふべけれ。苟しくも我、我にして美ならば、天下無情の人はあらじと信じて、樂しきこと、うれしきこと、にぎはしきこと、言はん方なし。十方みな佛、天下、悉皆わが友と觀ずれば、敵を防がん慮ばかりもなく、讎に報ひん心根も要なし。

○人世僥倖なし

因果の嚴そかなるを知り、天理に僥倖なきことを辨まへ、遺傳エテルギーなどの自然法を善く確認せば、大方の不平、大方の怨言は、ほゞ解散すべし。榮辱應報を目の見ゆる限りに觀察し、出世立身を五年十年の間だに計算する族は、むしろ學びずとこそ言ふべけれ。學は天人の際みを貫ぬき、情は宇宙の理はりにひそみてぞ、學ぶとは言ふなれ。たゞ眼前現世の外觀にのみ拘はんほどならば、新聞紙の通信のみ知りて澤山ならずや。豐太閤の父は百姓なりと言ふとも、百姓とは非豪傑を意味することゝなし。家康、三百年を維持すと言ふとも、たゞ偶然の幸ひにはあらず。深く養ふものは遠く顯はれ、忍び耐ゆるものは、久しく發す。苟しくも、報酬對應の天則を信ぜんには、人生如何んぞ順逆あらん。

○商　道

文明の餘澤に、俄かに地價を高め、相場の變遷に、忽然株をあげて、而も自力によるの富と思ふ人あり、憫れむべきなら

ずや。凡そ、十世につゞく舊家の身代に力耕に由らざるは少なく、時運に僥倖せし俄富權のよく三代につゞくは稀なり。もし仔細に其理を知らば、暴富を欲することあるまじきに、災を子孫に遺して得たりとする、必竟は商道を學びざる耳。

○白雲の郷

戀は清きものと、人の言ふめれど、大方はあやしきものなり戀の清きは、戀なりと知らぬうちの戀なるべし。戀に犠牲あれど、亦嫉妬あり、靈あれど亦醜骸あり。其の未だ達かざるに當りてや、理想なれど、既に分け入ては、白雲の境亦た蝮蛇はらばふ。凡そ、美くしきものは、眺むるにてそあるべけれと、悟りの人言へり。

○唯ひとり侶たれ

生れては死を思ひ、會ひては、別を思ひ、得ては、失なはんとを思ひ、榮華には、屈辱を思ひ、花に落花を思ふ。多恨の士、涙なきと稀なるが故に、其笑つねに潤ほふ。頑是なき幼な兒こそ、唯ひとり侶たれ。

繼母の地位（上）

昔し、或人は、「子を抱く母」の書に題して、「神此處に居ます」と、認めたる由なるが、繼母、繼子と言へば、驚ろくべき相違にて、忽ち非常の惡感觸を起さしむ。單に其名を聞きてだに、直ちに不快の思ひあらしむるは、抑そも誰に間違ひありて、かゝる悲慘を世には持來せしぞ。

余、つく〴〵と視察するに、繼子、繼母の衝突は、繼子が惡しきにもあらず、又繼母が惡しきにもあらず、左りとて、中に立ち傍はらに立つ人の惡しきにもあらず。必竟は、誰も惡しきにあらず、只だ運が惡しき也と思はしむる所以あり。

然るに繼子の問題に及べば、十人が十人、すぐさま繼母を惡しきものに言ひ做すも、世上一般の公論なるが、之は大いに間違ひたるものと思はるゝ也。凡そ、子供を遺されたる寡夫が、二度ぞひを撰ぶ時には、誰しも色戀の慾はあるべからず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よしありとても、年少初婚の時の如き浮きたる面白氣は必らず無きもの故、誰も篤實に能く考がへ、又人にも相談し、世話するものも其心持にて、撰擇を嚴そかにするヿ必定也。左れば、撰に當りて、他の後妻になる程の婦人は生れ付篤實好人物なるか、又は余程苦勞して我慢の氣の無くなりたるものなるべし、決して尋常の婦人にはあらざる也。然るに、かゝる優れたる婦人が、十人の十人、大抵、鬼か、蛇かの如くに言ひ倣さるゝ所以を思ひ見ば、大凡そかゝる惡結果の生じ來る所以は頗ぶる人生の秘機に存し、決して後妻其人の人物にのみ關するにあらざるヿを知らん。

夫れ、人は死すれば、惡しきヿ皆な忘れられて、善き事のみ追慕せらるゝもの也。今や、妻を失なひたる男子、其の亡妻の紀念にゆかしくなつかしく景慕しつゝある所ろに、かの後妻なるものは嫁ぎゆかんとする也。冒頭第一、不利の地に立つヿを免かれず。而して、先妻が遺愛の子には、叔父もあり叔母もあり、祖父も祖母もあり、出入商人も、近所合壁の人人も、皆な夫々掛念しつゝあり。後妻は、コノ包圍の中に突入せんする也、其の戰や苦戰と云ふべし。

然るに、此丈の事を覺悟して我もゆき、人もやり、彼も迎へるヿゆへ、何人にも、仇をろそかの輕卒はあるまじきヿなれ共、此所ぞ、人事の變、惡運の弄する所となりて、人の何人も思はざる意外の誤解衝突續々として生じ來るこそ、悲しけれ。噫、それ誰を咎めんや。

繼母來れり、繼子の扱かひ方如何んとは、四方八方より睨みつゝある也。此際に於ける子供の言ふヿ、爲すヿは、たとひ邪氣なく、頑是なきヿなりとも、一々理窟ありげに、人より見らるゝもの也。他所に行て、菓子を欲しがれば、家にて與へざるならんと疑がはせ、着物がよごれ居れば、一向に構ひ付けぬならんと疑はせ、遊びに來れば、あまり嚴し過ると疑はせ、余り遊びに來れば、家が面白くないのかと疑はす。何事にてもミナ心配掛念する人の目に映じて疑ひの種とならざるヿなし。左らば、斯く疑ふが惡しき乎と言ふに、惡しくとも善くとも、是れ心配する人の常にして、冷淡ならざる限り尋常人にとりては亦た已むを得ざる也。

然るに、子供なるものは、無頓着にしてお構ひなきや、外に出てゝ、其の放言する所、一々他の疑ひを增す斗り也。お前

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

内で食べないのかエ」と問へば、「いつも叱られて十分は食べぬ」ナドと返辭するヿあり。其故は、胃病にならぬ爲か、風引さぬ爲か、一々心切の理由あることでも、繼子の口より斯く放言せらるる時は、至つて人ぎゝの悪しきもの也。

此に於てか、人の菓子を與ふる時は、家に歸つては言ふなと敎へられ、又食べたければお來よと敎へられ、追々と母に秘して此處に出入し、遂に母の邪推を引起し、之よりして灰吹蛇を出すの大衝突を醸すヿ屢ば之れあり。

又、夫たる人も同様にて、自づと、妻の手前に遠慮し、ワザと目前に叱りて、かげに溫言するヿもあらん。もし一と度び如斯き掛引あらば、其の神秘の映ずるヿ迅速にて頑是なき子も自然に、外冷內溫の情理を解し、母の前にて父にヨソ／＼しく、母なき時に、咽語落涙の千萬無量を吐いて、いよ／＼父の心に嗟歎せしむるヿもあらん。

もし斯の如くならば、たとひ篤實なりし後妻といへども、漸次に邪推せざる能はず。たとひ氣樂なりし性質といへども、知らざる間に神經質とならざるべからず。初めに、アノ人ならばと撰まれたる後妻が、數年にして、神經過敏、邪推冷酷の質に化するヿの多き、此故也。豈に必らずしも、繼母たるものの罪ならんや。

夫れ、雷は八釜しけれども、霹靂の後、心地よし。陰鬱雨ふらざる時は、袖ぬらすヿなけれ共、甚はだ不快なり。家庭の内に於ては、怒る時は怒り、暴言する時は暴言しても跡に痕跡を遺さゞる、則はち最上の快樂なり。故に、子供は、八釜しく叱るヿを構はず、チリチリと、いぢめるヿを最惡とす。かゝる子供は、たゞ一日、たゞ一言の叱りにて、ピリッとして、手も足も出さぬほどに、所行を止めべき代りに、其心も亦た發達するヿなし。かゝる育ちの子が大人となり、かゝる子が大國民となるヿ決してなし。然るに今の繼子は、概してかゝるいぢけものとなりつゝあるに非ずや。

嗚呼、繼母、繼子の問題を再考すれば、其の罪何人にも歸すべからずして、たゞ運を惡しゝとするのみ。左れど、運は惡しくとも、かゝる運り合せの免かる可らずとせば、其の救濟方なかる可らず。諸君、果して如何んか思惟する。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○料理鹽梅の道

生間正起

編者云く、料理は裁斷工風なり、鹽梅は風格趣味あり。此等のもの、人間他の百般の事に顯はるると同時に、食膳机卓の上にも現はれ、一々、時代の好尙、人品の雅俗に隨がひて變ず。方今衣服住宅の上にも面白からぬ下司風の流行せる如く、料理の道にも、質實雅味の欠乏せる、已むを得ざるもの歟。生間家は、小笠原家以前の舊家にして、式方故實の専門たり、則はち料理道の如き、亦一端として百千年研修の遺法あり。正起君、近頃ろ上京し、有志に斯道を敎へんとして、其樣頗ぶる今俗に似ず。故に未だ多く聞くものあらずと雖ども、君が道の遠からずして大いに行はれんとは、吾人の信じて已まざる所ろ也。今ま時用に適すべき一二の說を乞ふて左に掲載す。

○冷　鯛　一種

鱗をふき、腹を去り、丸のまゝ白炙にして、胡麻の油をぬり又炙き、火能通りたらば、水につけ、十分に冷たるを、丸の儘鉢へ入れ、水をため、猪口にだし、醬油を入れ、おろし大根を付て出すべし。是は極暑によろしきもの也。

一〇

○茄子田樂

丸き茄子の皮を剝き、輪切にして、串に刺し、炙りて、胡麻の油を塗り、猶能く炙り、火十分に通りたれば、白味噌の擂りたるを、兩面へ塗付し、文火にて炙り、熬りたる黑胡麻を撒布すべし。東京には、殘念ながら、關西地方の人が、日常に用ゆる樣な滋養と美味とを兼備する結搆な白味噌がないゆへ東京の味噌て、此の田樂を拵へ樣と思たなれば、是非砂糖を少し混加せなければならん。砂糖を加へたる味噌は、頗ろ焦げ易きゆゑ、一層の注意を要す。

抑、此の田樂の稱は、豆腐田樂より來る、豆腐田樂の名は田舍の樂技より濫觴す、古へ、農夫、農時の間に、種々の樂技を演じて、相慰みしが、後ち、法師の技に移り、鎌倉の頃より、室町將軍の時代に至る迄、大に世に行はれしが、此の樂技變じて能藝となりしより、次第に衰へしものなり。法師の田樂を演ずるや、竿に上りて踊る、其の狀串に刺したる豆腐の能く相似たるより、之を田樂と名付けしものなり。茄子の樣も、亦相似たり、田樂の稱を下したるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○都下の紳士に告ぐ

余も、江戸ッ子の仲間入りをしたるゆゑ、他國の人に負けよまいと思ふて、腦まで病だが、食物食器は、關西地方の人に百歩も讓らにゃならん、味噌は惡るし、薄い醬油はなし、魚類は劣等な眞黑や鮪の肉を食ふて、舌を鼓し、自ら料理通と稱して遜色なきには困る。一日舊或大名の家來にて、舊幕時代に江戸勤番をなせし老人と物語せしに、話次食物の事に及びたる處、眞黑、鮪の如きは、舊幕時代には最下等人の食物なりしが、明治の今日では、紳士の食物となつている、魚が出世したのか、人間の口が下つたのか、兩者の一である、只魚類のみならず、總ての食物、江戸勤番の當時に比すれば、雲泥の差である、昔の樣な旨いものは、今日食ふとが出來んと云れた。余は、舊幕時代の江戸は知らんが、明治になつてから、食物が惡く變遷したといふと丈は分つた。そこで、至急に食物の改良がしたくなつたゆゑ、或料理屋の主人に相談した處が、大賛成で、今日の東京料理は、維新後田舍料理が侵入した結果である、實に不都合なる點が多い、私くしも商賣しながら、是れではならん他事は追々改良が出來て進んで來たが、料理だけは退歩したまゝです、關西地方の料理には迚も〳〵及ばんです、私くしへ御相談の事は至極御尤もですから、及ばずながら同業者に向つて遊說を試んと、熱心に受合ひ吳れしゆゑ、數日の後遊說の結果を尋ねに行きし處、手を拱し首を垂れ、長大息して曰く、駄目です、同業者の申しますには今日の料理で、得意先も客も、皆滿足して居るゆゑ、毫も改良の必要はない、直段の貴い旨き魚類を用ゆれば、隨つて價が貴くなる、夫れよりは半腐敗の魚でも、何んでも、直段を安くして、多く盛り付けた方が、客の氣に入て、利益が多い、魚の優劣、品の善惡、今日問ふ所にあらず、御前の樣なことを言ふて居たら、錢儲けが出來やせんといふて、翅付けて、相手になりません、實に困つたものでご座ります、折角御引受け致しましたが、私の力では迚も及びませんと、斷られた、其時は非常に腹が立たが、退いて考ふれば、目前の利に趨る商人の考へから見れば、實に斯の如きものであろふ、是れは全く、余が改良の方面を誤つたのである、是上は都下の紳士の口を高尙にして貰へば、料

理の眞美が判るゆゑ、出入の料理屋へ向て小言を云ふ事が出來る、そうなると料理屋が必屈理して目を醒し、品格のよき善良なる品を用ゆる樣になる、爾ふなれば自然と料理の改良が出來て、世間に耻かしくない樣になつて、旨いものが喰べるが、都下の紳士達よ、余が言を以て如何となすや

理想の男子（三）

◉私の理想の男子を申上ますれば前に他の御婦人から御話しになつた事と同じ樣で、大差ございませんから、私は一ッ家庭に於る夫人が良人に對しての理想として申上ます。

そこで、男子らしき男子、智ある所の人と云ふ事は、勿論でございます、けれども、其内私が最も望みます事は、德義を重じます所の男子を一番と致します。德義がなければ、婦人の眞の同情は得られませんと思ひます。もし此同情を欠きましたならば、どの樣に婦人の義務は良人を助け家政を善くすべきものだと申ましても、其は無理な注文だと思ひます。一躰女子は、幼少の時より敎へられ又話しに聞きましても、女子が一度良人にまみえたならば、嫉妬を謹み、從順であれと、何かにつけ申されます。勿論婦人の美德でご座いますから、謹まねばなりません。けれども、良人たる人が、餘りに德義を重じませず、妻を取扱ひますするのに、宜敷を得ませんければ、如何に謹みよき婦人にても、遂りは餘りよき心地の致ませんから、自然不愉快にくらす事になります。そうなりますと、どの樣に婦人の義務だと申しましても、不愉快の爲に、自然心がにぶりまして、とても高尙なよき考への出なくなります事は、普通一般の情理だろうと思はれます。たとへ外の事に欠た所が御座いましても、德義を重じます所の男子ならば、家庭としては、美しく立派なる者を造り、必ず一家の治まる事と思ひます。彼樣な男子は、夫人として良人に望むでなく、他の人から見ましても、美く尊敬致事で御座います

◉私は永らく宣敎師女學校に居まして、西洋人の善い所も見ましたが、宣敎師のケチ〳〵する所も見まして餘程あきました。西洋の男子は餘程男子らしい所もあり、サッパリと致して居りますが、宣敎師方には餘り其邊はありません、而してその眞似を爲さる男子が、今の我國には多いようです。

狂瀾之觀

記錄

奧邃

某月日錄、文明の事業は理想の人を造るに在り、造とは之をして此に再活するを得せしむるを謂ふ、理想の人は自由の生命に息するに因て起る、人は自由に生命に息するに及んで始めて古道新學の法に達するを得、舊習なる思想感情を脫却する能はずして自ら光明なる精神より遮斷する者は一に唯だ斃る、死を以て期す、憫むべし。

人間其斃るを以て自ら誇るが如きは抑も笑ふべし、昔人言へる有るか、斃れて後ち止むと、而して今人も亦同く云はずや世の所謂學者君子者脫俗者皆な云はずや斃れて後ち止むと、而して凡人俗物、世の王公より奴隷に至るまで又皆な謂ふ斃るゝ有るのみと、古より今に至るまで野蠻より文明に至るまて其退歩進歩を通じて人間を纏繞する思念は唯だ一の「斃る」あるが如きに非らずや、同く斃なり、今ま之を鼠に冠すれば人皆な之を醜む、而して此醜物、志士仁人の名を以て自ら期する者と雖も亦皆な取つて以て己れ最終の標準と爲すが如きは何ぞや、形身の生命と雖も如此自棄して以て無罪の人とは爲るを得べからず、若し斃死にして果して天命に出づるか、其れ何を以て醜臭悲毒を遺すこと如彼なるや、夫れ小僧よりして大人に長ずるは生道の當然なり、地方の小官より天方の大官に轉ずるは榮耀の進行なり、此の理に從はゞ則ち善人の去行亦た固より之れ喜ぶべき所に在り、宜く告別送別、盛宴を開て家邦之が爲に賀して樂むべし、其實果して如此を得ば則ち文字或は始く「斃」を用るも亦可ならん、何となれば、所謂斃るは斃るに非ずして上進する者なればなり、若し其意味上行にして悅樂を寓せば暫く此の蠻語を用ゆと雖も甚だ不可なるなし、其實際然るに非らずんば自稱文明も人に於ては未だ進歩せる所無し、故に云く、自稱文明中信者なきなりと、有らば則ち必ず斃者を破る。

吾之を聞く、新人なる者有り、大太古の道に達し巍然として呼んで曰く、吾儕有志は必ず立つて而る後止まる有りと、蓋

し立とは、新天の光下に淸地の活體に登りて福德の樹立を成すを謂ふ。

夫れ「我儕必ず立つて而る後ち止まる」者、今之を斃れて後止む者に比すれば、其主と奴と如何ん、其勝と敗と如何、其明と闇と如何ん、勇と怯と如何ん、合と散と如何ん、公と私と如何ん、積と消と其極果して如何ぞや、古道新學の法に達する者に非ずんば共に生命の息を語るに足らず、蓋し大統一なる社會は自由の生息に因て成り、大文明の事業は此に因て興る者なればなり、而して吾が所謂大統一なる者は、啻一時に統一なるに非ず、誠に實に永遠の生命に統一なる者なり、斃れて止む者に非らず、若し斃るれば必ず復た起ち、復た起つて三に至り七に至り、而して七に乘ずるに七を以てして必ず新天新地に樹立するに至るに非れば已まざるものなり、此はクライストの道にして其平坦に訓せる所なり、而して宣者は之を僞宣す、故に云く信者なしと。

善く信ずる者は却て僞宣者の所謂異教人の中に在り、吾儕未だプラト、ソクラテスの精神果してアブラハムの前に在りしや否やを知らすと雖、彼等は一の純然たるクリスチアンなるを知る、彼等は一大統一の道を時に應じて講ずる者なればなり、美を尊び淸を貴ぶ者なればなり、彼等は蓋しアブラハムの前に於てクライストクリスタに奉事したる者ならん、而して又神様は無爲なりと憤慨したるクリスチアンカーライルの如きは甚だプラトを知らずと雖も然れども之を其のアメリカの弟イメルソンに比すれば善く之を知る、イメルソンは連夜プラトを夢みて之に友たりと誤認す、カーライルは人道中に於てプラトを遠見して其益人たるを知り而して復た求めて之と友たらず、此れ惜むべしと爲す、彼れ若し之と友たれば彼れ必ず美を講じ、錦衣以て其噴火の燄を社會に防ぎしならん此に客來。

難解言中

人の生命に活る、安息無かるべかちず、人にして安息なければ以て生命に活くべからず、然れば則ち眞實なる安息は如何曰く、誠に言ひ難し、

貴神に安息有り、クライストに安息有り、クライストの此地

に和通せらる、其自體を以すれば、神氣收聚の時態を以て安息と爲す、又其他體に依ては、クライスト復新入胸の時態、此れ其安息也、

言に云く爾の知は形影の鄕を離るる時に及んて人類の爲に開く、視よ今人間は悲慘に居る、然りと雖、悲慘は永活する能はず、大終來れば悲慘去る、而して人間成て快樂の鄕と爲る信者は信ず、

和樂の性は律音に由て游動す、その律たる節然也、節は節に中りて而して和樂を致す、緻たり、繹たり、心胄有體、皆眞樂に動き、動て而て善く繼く、是を以て已まず、夫れ私己を神に献ぜし人は、神之を受く、此れ神の有と爲る、此れ神に屬して而して神此に居る、是を以て樂き也、若夫れ無神の者は、樂み無し、常に死亡す、而して悲慘其路に當る、

形にも現有り不現有り、不現必ずしも無體に非ず、今や現形の勢ひ猶且之を見る者罕也、況や其中裏に存して上天の品性なる者に於てをや、

神は天に在り、神の在る所即天也、故に天は神に由る、神出て天に現すれば、天即神たり、凡て神に在らざる者は天に有る無し、天に在る者は一として神に於て存する者に非は無し」地に於るとなく、天に於ると無く、凡て交際の實なる者は必らず形を以す、貴神は眞に有體たり、之を在天の父母と稱す人の父母たり、クライストの父母たり、クライストの有體たるは、彼れは父と同一たれば也、是故に神に事へんと欲する者は、實體を以て實事を務めざるべからざる也、

實體を以て神に事へんと欲する者は、此を以てクライストに勤勞す、蓋しクライストと神は一也、故に彼を信ずる者は神を信ずる者也、彼を見る者は神を見る者也、彼に事る者は神に事ふる者也、故に實體を以て實體のクライストクリスタに勤勞する者は、實體の天父天母に事へて樂しむ者也、クライストは即ち神也、而して又天の門たり、人未だクライストに由らずして初天に達する者有らず、況んや天の天に於てをや」クライストは、有體にして復活し、有體にして昇天し、有體にして天に在り、將に復た有體にして來降し而して生命に於て無體なる我儕をして生命に於て有體ならしめんとす、此れ乃ちクライスト耶蘇にして、天父と同一なる唯一眞人也、若し彼にして無體ならば、此れ復活なく、昇天なく、終にクラ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

イスト無き也、故に無體の想は、神なき也、父なき也、本源なき者也、故に無體の信は、クライストを信ずと謂ふと雖も、信なき也、此れ虚信也、即ち邪信也、

靈心には靈心の體格有り、之を有せざる者は神に於て存する者に非る也、其物や在る如しと雖も神息に息せず、其物や或は信ずる所有る如しと雖も死信に止まる、

身に身體有り、知に知體有り、貴神の人に游動するに及べば知の體は身の體と相織て游動す、此れ大收生息にして卑近を洩さざる者也、此の人や神有にして又神を有す、即父子の親交也、此れ貴神に於て安んず、此れ神の樂に樂む者、誠に世の樂みの如きに非る也、神言降りては之を受け、溫暖なる愛は其深胷に滴り生命の火は其中心に點じ、而して內纒外繞全體に充滿す、

眞愛は、過重の感無し、至上の愛は至善にして常に宇宙の人を養はる、大となく小となく宇宙を通じて信者を養はる、之を養て至らざる所無し、故に信者は柔善の感有りて恐る無く信任の敬ありて激する無し、神は偏倚愛寵する所有らざる也故に信者は靜にして善く動き、深きより又深きに入り、其貴神に進むこと深遠なるに從ひ、深淵なる天地更に其中身に開明す、盖し貴神の體は二生息を以て人を發養す、一は人の中心より其外に進んで開發し、他は、其外より、上より、降て其內に依る、其內開外包如此き所以の者は、神國は內外に兩存して、其進むや人に於て相待ち、而して其成るや人に於て貫織徹化する者なれば也、所謂神旨地に成る天に成るが如きは、此の時に在り、

抑も、天は無涯と雖も一大活天に外ならず、地は無疆と雖も一大活地に外ならず、人は無數と雖も亦一大活人に外ならず故に被造箇人は獨り以て人と爲る能はざる也、

貴神は完體たり、而して人之を見る能はず、然と雖も亦交際の福なくんばあらず、唯だ其交たる形體より以上に在れば、人之を見る能はざる也、神體は宇宙に貫達して常に其上に在り、其顯現するに及ては、唯だ天律たる神旨の在る處、故に神旨の外に於ては微點と雖も觀るべからず、即ち人は貴神に裸觸して生きる事能はざる也、

神の人有り、父に告ふして云く、我れ安息す、我敢て願ふ所無し、我敢て恐る所無し、我は空たり、一物なし、唯だ萬物

我が中に動く、此れ旋轉たる神動に於て動く、萬物我に動く、其念は愛也、萬物我に動く、其感は樂也、所謂旋轉たる神働我が中に在り、而して此の神働は又我を包括す、夫れ神働は純如たり、兩然一存、外內和合、眞人固より然り、故其愛たる亦然り、其樂み亦然り、皆兩體一存、兩存一體、時成るの日、主君の新人に乘じ之を通ふして降るや、其旋轉神働に由る如此ならずして至るもの有らざる也、

雜録

花子のなげき（上）

故中島湘煙女史遺稿

榮辱悲歡夢一塲と悟り見ればこゝにものする可憐の乙女が境遇讀み去て何等の興味なしされど未だ人情世態といふもの、何たるを解し得ぬ妙齡の乙女が胸につゝみきれぬといふ悲しさをこの筆者に自白せしものを聞くに縱然ひ身を憫れなる境遇中に置きても一人の同情を表してその憫れを酌取りくるゝ者あれば幾分か悲しさを減却すべけれど表に幸福の衣をまとふて裏に悲恨の肉を包み何人より見るも幸福の一人と數へられて世を送らねばならぬ身こそ實に辛らからずやとこの數語には筆者も痛く同情を表したれば事を枉げず文を弄ばず其境遇のありのまゝを寫し以て乙女が悲恨の幾分を減ぜんとの意に應ぜんと欲するのみにして固より小說樣と唱ふべきものにあらず。

この乙女の名は花子明治丁酉の歲芳紀二十歲顏せの嬋妍たる姿の窈窕たるのみならず人をして愛せしむるも馴れしめざる氣品凛として備はり實に得易からざるの美人なり。

世の小說家が可憐の女兒を寫し出すには必ず筆を竭くして其美を擧ぐるは特に讀者の同情を得るための一策ならんと邪推せるもありしに今この花子が不幸の乙女にして且絕群の美人なるを以て見れば謂はゆる美人薄命の語は自ら天緣の免がるべからざるものありて然る乎。

花子が家腕車の便によれば京華を隔つ僅か一日程に過ぎざるの一村鄕なり小村とはいへ白堊高く聳え綠壁緩く繞りたる豪家の少なからざる中にも第一に位するは花子が家にして數十年の昔しよりいかなる暴風洪水にも貧乏ゆるぎだにせぬと誇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りて建築こそ今に其儘なれど其まゝならぬ一家の非運そもいつのころより傾き始めしか宛も迅雷耳を掩ふに遑なきの有様當主さへも其原を知らざれば況して他人は只人事の恃むべからざるに驚くの外なかりしとぞ。

京の水ならイは色澤も麗はしからず下絵も染物屋の筆になりては氣韻に乏し雪竹寒禽の模様は如何にちと沈着に過ぎるの嫌ひあり桃花流水は派出やかなれど俗氣を免かれぬいつそ朦朧たる春月に瀟洒たる梅花の圖こそ趣き多からん下着には鹽瀬若くは羽二重の緋むく色合好かるべきかと無事太平なる富家の事とて一領の衣を作るにも評議を累ねやつと出來揚りて振袖惜しげなく春風に飜しつゝ冬やおまへの名はさむさうでいやだきよは顔がうつくしくていゝからきよに新らしい羽子板持て來てといつてよ杯我儘をつくして遊び暮せし世も僅かに花子が十三の年に名殘りを留めたり苦勞知らずに育ちし十三の乙女爭てか家の浮沈興亡の何たるを知るべき氣にいりのいらぬの差別なく主家より暇出すを待たてあちらよりいとまを乞ひてボツリ〳〵と下女は減じたれど親類分家の人々日となく夜となく來集りて平日よりも却て賑かなるを嬉しき事に感じいつ迄もこの通りにてあれかしとおもひたるも憐れなりこれぞ累代の家產悉く他人の有に歸する刹那にてありしと。』

どうも腹が空つて困る洋食でも日本料理でもとんと甘くない支那流にても代て見たらすこしは食るかナ……然し燕巣の御馳走も餘り甘心しないね醫者が運動が足らぬからだといふが寒くて外出も出來ないこれを以て考ふると人は少壯の時代に限る數片の燒芋夜書を讀み一穗の燈影坐して劍を看るといふころは事として物として快ならざるはなしだつた……して見ると君老ては百事休する矣だね。

恐れいります御前の如きはなか〳〵以て御壯んな事で。

いやさうでないこの近年餘程弱たからね。

ハイハイ御尤で御坐ります何分國家の經營に一方ならず。

ナニそうでもないがね然し後進の若手に任し切るといふ譯にも、フン學問かそうさ學問や理屈は相當にやるよ只わられの時代の如く膽を鍜へるの一事を欠て居るから何か事の起りし節よくやるかどうかねそら後進の輩がほんとうにやる事が出來れば高踏勇退は何人も好むところだ其心情を解してか解せずしてか獵々いふ奴のうるさきを忍耐してからやつて居るの

も愛國の外なしだはね。
左樣で御座りますともナ ニうるさく申のも畢竟は嫉妬心に過ぎないので御座い升。
さうさ其證據には聊か機嫌取つてやると忽ちぐんにやりだからね在野の志士とか唱へて居る先生達の弱さ加减には實以て一驚を喫したね交際がない以前は多少手こたへするだらうと思つたがいやはや組し易いものだよ折々呼んで饅頭でも御馳走すればすむのだからね一人甘く引こめば後は將碁倒しだ、然しやりやうがわるいと非常の失體を招くから火蓋をきる前に餘程ねらいをたしかめなくてはね。
成程實に御苦辛の程。
ダガ子敝れたる縕袍を衣ての子路氣風が薄らぎて黄金時代となつたから餘程の操縱の便ありだ。
デ御座りませうとも且いくらもがくとて到底元勳の諸公とは智識の度か違つて居りますから。
サさうでもあるまいがね。
と壯嚴華麗なる樓閣に住し勳位にのみ鼻うごめかし尺餘の硝子窓を天地と心得槖駝師がひねくり廻はして自然の美を態と不具者と爲したる庭木を賞し額のみてら〳〵する洋爐に髯もみあげて屬官の巧言令色に涎れたらし玉ふ君々には夢にも知り玉はぬ農村の樂郷晝餉中茶を待かねる腹を抱へて渾身に大陽を浴び悠々と吹き出す煙草に四方八方の物語り氣の合にあつたる仲間露程も毛程も罪飾りのなき天地何人にも羨まれぬところこそ羨しといふ人もあるならん。
天道樣はもつたいないものだ人は知らぬとおもつてもちやんと酬て來るから女は少し奇麗だと其奇麗なところを知らぬ顏のして居られないものと見えるすぐ人に見せたくなる見せると感心させたくなるといふ鹽梅しきだからそこになると内の奴なんかはいゝね。
おい〳〵そればかりは御免だなんぞといふと内の奴が出るわれ達貴樣が内の奴のはなしには耳蛸だぜ。
おまへなんかすぐさういふからいけないわいどうゆう勢か内の奴の事いつてる時が一番いゝこゝろもちだ。
分つてるよだからさおまへ人の居ない時いくらでもいゝな。
だつて人の居ない時やいへやしないか。
困るなまたいつか緩くり聞よだからいふはよしなナ―安公」

さうださうだそれより其奇麗なのがどうしたといふんだ夫をいひな。

いひなつてわれに聞かなくとも誰も知てるじやないか別品だ奇麗だいつても腹の中腐てるちふ事よさういつちやをかしい申分だがご面相は他人が見ちやどうだか知らぬが腹の皮剝て見せたい程の深切ものは内の——。

またはじめやがつたこいつには誰も困る貴樣のやうにいつてるが若や其深切ものの内の奴が死にてもすりや貴樣どうする

ナニ一所に死ぬアハ…………。

こいつは驚いたモー貴樣泣てるじやないかなんと弱い奴もあるものだ泣くにや及ばないや緣起がよくないさうさうそう己ら恐るかつたがまんしなよナニネ死ぬといつたのは貴樣の内の奴の事じやないよそうその奇麗な人が今度はいよ／＼だてい事よ。

さうだつてね幾ら心得がよくないにしろ死ぬとして見りやか愛そうだ。

ナニネ心得が惡るくもないのだよあの評判は全く嘘だとよ。

それじや罪の事だ。

親類によくない奴があつてあんな評判をいひふらすうへに僞證文までこさへてるんだと。

仕方がないね何分旦那は人がよすぎるからだ。

わるくいや天保錢だから。

さうだね、と。

村人等が吾家の噂さをする樣は夢にも知らぬ花子母君は京見物にゆき玉ひしなればやがて襟善の鹿子高新の友染白牡丹の花笄小町の丁子貌お芥子の人形駿河屋の羊羹土産にもたらし玉ふなるべしゆうちやん愛ちやんにも分てよろこばさんとのたのみは嵐に消て花咲かずおもへばあの時乘り玉ひし山輿より落ちんばかりにふりむきて母樣はすぐ歸るからおとなしくせよ喧嘩して由二なかすまいぞお土産はこの母樣がといひて急にハンカチーフて鼻かみ玉ひしが此世の訣れてありしか最後てありしか最早この口で母樣といふ事の出來ぬかと僅か三月四月か浮世のかなしみを知る身となりしが境遇の勢力こそ恐ろしけれ。

若手の醫者に其人ありと知るものは知る京都病院長の某氏が有ん限りの腕を盡したれど天命には勝つよしもなく藥臭き硝

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

子窓看護婦の膝にもたれ見るともなしに見る青柳の風を迎かへて婀娜として舞ひ香を尋ねる嬌蝶の繽紛として狂ふ様一として感慨の種ならぬはなくいつまでも春は此身にあるものとおもひし迷の覺むる今は迷後の味を嘗むるの遑まなく黑き幕に掩はるゝ一夜の翌日は雨乎將晴乎分らぬか天の配剤この配剤は免かれぬと悟りても悟られぬは可愛き子女の前途なる慳貪なる親族が重圍の中に陥り玉ふ人よしの夫妾死しなば忽ち四面楚歌の聲美人と生れし花子今はこの美人が心にかゝる親戚の惡計妾寃を雪がずして死するが如きは些事たるのみ祖先に申譯なしとはいへ大家の一時にくつがへる運ならば憾まんやうなし只憾らむ妾が運わるくも美人と生みし花子いかなる薄命に落るとも緞子の夜具に暖かき夢結ぶの身となるな輝く太陽の影にすみて笑みては酌み媚びては謳ふの身となるなうす〳〵村の噂さを聞きてこの母をなまめきたるものとおもひはせぬかよしおもふともわれは人にうしろ指さゝる身とはなるまいぞと千愁萬恨を胸に疊みて不歸の人となりしも憐れなり。

舎監の四ヶ月（其一）

有美

○また…………君あんなものを書いては女たちに惡くまれるよと、おッ仰るんですか。なる程、随分激烈に出かけましたからナ。それで、殘念だが沒書とするによッて、何か其代りをと仰せになるんですか…………これは誠に恐れ入り奉りましたナっ 舎監の四ヶ月…………といふものを書いて見給へ…………言文一致でもよいから大至急に。これは益々大弱りですナ。然し…………よろしい。やッて見ませう。

○まア舎監なんてもの…………これは生命のいらぬ人でなければするものでありません。大抵丈夫な身躰の人でも、眞面目に三年やッたら、死んでしまうだらうと思ひます。丁度、僕が舎監をやり出してから三ヶ月目の頃でした、長く遇はなかッた友人に遇ッたら、君はドウも非常に瘠せたと驚かれましたが、この同じ友人に又舎監を辭めてから一ヶ月たたぬうちに遇ひますと、今度は肥ッたと祝はれました。まア、こんな譯なので…………。

○それも其筈です。まづ第一に日夜舎監室に起臥して居ると

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いふこと……これが何でも無い樣に見えて、實は非常の大難事なのですから。僕なぞは……縣立の中學校でしたが……隨分是までの先生たちとは軌を異にして、力めて磊落な態度を取り、舍監室内は素より、巡視をするにも一切袴をつけず、菓子も食へば酒も飲むといふ程にしてましたが、それて……仲々心の底に休みといふものが寸時も無い。何時でもお役所に詰め切ッてる樣な氣がして、これだけでも骨の折れることは、一ト通りや二タ通りてはありません。二百人も寄宿生が居ると、やつ等が、舍監室にナンのカンのと出這入りする爲めに戸を開閉する音を聽くだけても、モウ充分疲れてしまいますさア。

○僕が妙な張合て、自ら義勇舍監（一名代用舍監）と稱して兎も角も、舍監の任務を取ッてから約五日ばかりも經過か經過ぬに、これは……また……一大事が寄宿舍内に起ッたのてす。

○正午十二時頃の授業を終ッて舍監室に歸ると、隣の娯樂室にエライ議論の聲がする。覗いて見ると、二年生の或る者と四年生の或る者とがベースボール用具のことから喧嘩を始めたらしく、殆んど寄宿舍中の生徒は皆な詰めかけてこれを傍聽してゐる。そのうちには言葉に仲々花が咲いて來て、『犬』だの『畜生』だのと吠へる仕末にもなッたやうでしたが、口だけの爭ならと放棄ッて置きました。ところが愈々ソウすまして居れ無くなッたといふのは……腕力沙汰になるらしい趣がアリ／＼と聞える樣になッたからなので……。

○僕だからとて一疋の男でさアー子……。大切な人の子を預ッてて、これに傷でもつけさしては濟みません。第一その書生の兩親に申譯が立たない。……すぐ飛ひ出してかけつけると、異口同音に『制裁／＼』と殆んど全寄宿生を擧げて其二年生に喰ッてかゝッて居る。その狀焉然狂へるが如してしたよ。一躰、この男は生意氣で上級生に無禮を働き、この男あるが故に舍内の治安も亂れる次第とは、其塲の輿論らしかッたのです。平生溫厚篤學を以て目せられてゐた連中まで口々に罵りの聲高く、憤慨の氣を眉宇の間に漏らして『制裁／＼』と叫びたてゝ居る。

○もうこうなッては、何をいふて聞かせても到底耳に這入るものでない。早や鐵拳は握りかためられ、或る書生の如きは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

氣早やにも棒切れを持ち出しなぞし、殺氣横溢として物すごき光景になつて來た。仲に譯のわかつた書生なぞは、切りに僕に舍監室へ引ッ込むことを勸める『これまでの舍監は皆な見ても見ぬ振を爲し、制裁はドシ〳〵やらする先例があるから、先生も此處には居らぬ方がよい』とは、其言ひ草です。然し、僕は一歩も去らぬ………またドウしてオメ〳〵去られるものですか………。

○『これまでの舍監はドウであッても、僕が舍監をして生徒を預ッてる間は、擲らせるは愚か………指壹本だからとて差させる譯には行かぬ』と、色々宥めもし又叱りもするが、事情は愈々切迫するばかりである。血、………少なくとも鐵拳亂下は一瞬時のうちに迫まッて來た。止むを得ん………實に止むを得ん………コウなッては意地である。この上はと僕も一つ、その書生を保護する決心になり、又一つにはこれを好機として鐵拳制裁の蠻風を生徒間より一掃してやらうといふ心も起ッて來たので、兎も角もとその責めたてられてる書生を舍監室まで引きあげて來たのサ。

○流石は學生なもので『舍監室は神聖にして侵すべからず』と僕が宣言したら、マサかに其書生を奪ひ還さうと、ドヤ〳〵室に入り込んでも來ぬ。然し、二三人のものが禮を謙くして這入り來り、しばらく其書生を貸してくれよとの申込みを僕まで持ち出した。『それは出來ぬ』と僕は簡短に跳ねつけたのです、斷じて跳ねつけたのです。

○舍監室の戶口は實に人の山を築ひて居る。通學生までが助勢しだして、無量二百五十人ばかりの生徒………これが皆な押し合ひヒシ合ひ『ワーワー』と鬨聲を作りながら『なぐッてしまへ〳〵』と猛けるさまは、少し氣の弱いものなら眼を眩す位なのです。全く薄氣味が惡るい程でしたよ。僕は予………あの佛蘭西革命の時分に王を殺させやう王を殺させやうと裁判所の入口に詰めかけたMOB（一揆）は、成るほど………こんなものだッたらうと思ひましたのです。

○さて、鎮壓の法は無い。丁度その日は午後二時頃より近かく辭職して郷里に歸去する一教諭を停車場まで生徒一同見送ることになッてたので、これ幸ひと、早や一時も過ぎたこと故、喇叭手に命じ戶外に於て集合喇叭を吹かしめた。僕はこれでMOBが解散し、停車場行のために隊列を作るだらうと思ッ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たのです。ところが、ソウ僕の思ふ通りには行かず、騒ぎは益々激しくなり、鬨聲の愈々すさまじくなるばかりである。

○モウ駄目だ………言葉や説諭ては寸功も無いといふことが僕にはハッキリと見えて來たのです。………僕も實際は全くアグンだのですよ。然し、アグンだと同時に、このナマクラな不得要領な不正直な僕も恐ろしいまで眞面目になッたらしい。………まづ眼鏡をはづし上衣を脫ぎ、續いて胴服を脫ぎホワイトシャツまで取りのけてしまッて、半袖のメリヤスとズボンたけになッた。これには生徒ども、何を爲すのかと、餘程驚いたらしい。

○『さアー來い………何人でも來い。僕はこれから、この書生を其居室まで送り屆けて室長に渡し、室長に保護をさせる積だ。その途て擲りたいなら勝手になぐるがよい。諸君いくらても擲りなさい、然し僕は舍監てある。諸君になぐらせる譯には行かぬ。諸君が擲ぐらんとすれば、僕は何處〳〵までも防ぐ………全力を盡くして防ぎ全力を盡くして保護する。さア來い………なぐるならなぐッて見ろ』と、其書生を一方の腕に擁して、エライ權幕て舍監室を出たのです。そのうちに僕の胸はモウ堪えられなくなッて來た。

○五六歩廊下を歩むや、僕は人目を耻ぢずに高く泣き出してしまッた。僕はその時その書生の手を固く握りて『けふの事は決して死ぬまで忘れてはならないよ。エイか〳〵………よくわかッたか』といふて聞かしたのです。『先生、どうぞ私のところをツキ出して皆なに擲らしてください。私しは出てなぐられて來ます』と、石の如き冷たきその書生も二つ三つほどホロリと涙の滴を流した。僕は………アー………これて先づよしと思ふて、實に神様に感謝の祈を捧げましたよ。この惡魔主義の僕がサ………。

○MOBは早や解散して、停車塲行の隊列を作ッてた。僕は其何時の間に作られしやを知らなかッたのです。………舍監は實に生命がけでやらないと、本當にはやれません。進軍ラッパは鳴り出しました。

(以下次號)

野每春其必華　草無朝而遺露

ゲーテとカーライル

新渡戸稲造君談話

◎カーライルが言つたに、人間、十六七才から二十五六迄で晩くて、三十又は三十五六まで、大抵、氣鬱となる。ならなければマヅ片環である。

◎私なども、幸ひにして片環の方でなかつたか、其の病に罹つた。明治十三年の時の事で、十七であつたかと思ふが、人間ナミにソノ病にかゝり、何も面白くない、熱心も起らないたゞムヤミに書物を讀んで見ても一向氣に張が起らない。スルト、或日、インデペンデント(雜誌)を讀むと、カーライルの一句が掲げてあつて、夫が非常に心を動かした。生き返る樣な心持が爲ました。それて、カーライルとは何ものだと思つて、字引など引いて見ても分らぬ、誰もソンナ人の書物を一冊も持つて居らぬ。夫で、その年、東京に出て、丸善で聞て見た。カーライルのサアトル、リサルタスと云ふのは無い乎。スルト、丸善で。ナニ、カーライル。ソンナ本は無い、ソンナ有名でないものの本は無いと言つた。

◎夫から、凡そ二十軒あまり本屋を尋ねて見ても、何處にも

無いのみか、ソンナ名を知つて居るものはない。横濱に行つて、クレー、ワルシで聞くと、さすが異人の本屋だ、知つては居つたが、今は無いと言つた。それで、やうやく西洋人に賴んで、ワザ〳〵取寄せて貰つた位の事でした。

◎それよりは、サアトル、リサルタスを何度讀んだか知らぬ十四邊までは、シルシをつけたから分つて居るが、大抵、十八遍は讀んだと思ふが、其時生命を救つてくれた大恩人であるのみならず、今もつて恩人である、讀む毎に、シルシをつけて、夫に年月を書き入れてあるものを見ると、其の當時、非常に感激した所でも、今は何とも思はぬともある、コンナとに感心したのかと自分で思ふとも無いではないが、然し、今もつて、私に取つては、聖書に次ぐの一大書籍である。

◎此の間、内村が來て。マダ、カアライル乎、と言つて叱つて居たが、成程殘念ではあるが、まだ、カアライルである。然し、カアライルを早く卒業する人があるが、夫はどふも、ちと不思議であると思ふ。

◎英國でも、今では八釜しく言ふ樣になつたが、元はそうでなかつた。十三年前に初めて英國に行つた時、チエルセーに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遊んで、カーライルの住んだ家を見た時には、まだ、ガラスでも破れたまゝで、少しも構つて無つた。夫が、昨年、行て見ると、一から十まで、すべてカーライルが生存中の時の通りに仕てある。椅子の置方でも、カーライルの死んだ時にはコウ云ふ風に、こゝに椅子がコウ置てあつたと云ふ迄、研究して其通りにしてある。

◎コレは、カーライルの事が段々に世に知られて來るのであるが、シカシ、一躰に、カーライルと云ふ人は、生きて居る内は人に嫌がられた男で、會つて話しでもすると、實にイヤナ人であつた、夫が死ぬると、棺を盖ふて評定まり、善いと計りが追慕さるるに至つたのである。

◎カーライルの隣に住んだ人に聞くと、よく妻君を叱つて、妻君が屢ば泣いて居つたとがあつた相ナ。誰にでも、無愛相て、剛腹て、少しも愛嬌が無い。かつて、カーライルを神の樣に思つて居た米國人が、極めて鄭寧な手紙を送つて、是非一度お會ひを願ひたいと言つてやると、短かいハガキをやつて、明日來いと言ふとだから、行くと、カーライルは、少しも構はず、机の上て何んだか書いて居る。崇拜家だから、肅しんで待つて居ると、フイと見て「ヲイ、そこに落てる紙を取つてくれ」と言ふから、丁寧に取つて捧げると、また構はず、書いて居たが、書き了つて、彼を見て「お前、何處の人だ、アメリカ人、アメリカ人は大嫌ひだと言つたぎりてあつた相ナ。

◎また、女皇ビクトリアが、一度拜謁を許して、お會ひになりたいと云ふとて、大臣が豫かじめ行つて打合はせると、カーライルの言ふには「夫は會てあげてもいゝ」と言ふから、夫では、いつ〳〵拜謁を願はれる樣にと言ふと「ナニ、用があるなら、コチラに來られるがいゝ、私の方では、用は無いのだ」と云ふから、困つて仕舞つた。然し、陛下がお出になるとは出來ぬから、何處かて會はれるやうにすると、陛下の方が、あとから來られた、大臣が、謹んで、陛下て居らせられると言ふと「左樣で。かねてお名前は聞て居りました」と言つた相ナ。

◎コンナ風だから、會つて見て面白いとは無い。また、コンナ風の人て、夫てアンナ文躰が出來たのである。其の文躰をたゞ眞似をしたからと言つて出來るものでは無い。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎私は、カーライルによつて、何を學んだ乎。外の方は、又外の大きな事があるのであらふ、私はたゞ私丈に學んだよが三つある。其の第一は、世の中は、ヂミなものであると云ふよである。

（次號完結）。

定見深睡錄

村のハムプデンも、ミルトンも有之候よしに付、私は支那の蕭何とやら申すものにまね、沛公尙ほ宿屋の亭主を爲らるる內に之に說かんとて、切りに腹中の秘案をもらし候處、筆くせのかろきものありて悉とく筆記いたし候。公けにするを許せとの儀。ちと自分免許の氣味に合せて、之を許し候。其由を引す。深睡老人。

一。墓地の改良　今分にて追々增加せば、墓地は何れ程廣くとも、忽ち一パイに相成り可申、末には、三府五港の町の中を悉皆墓所にすとも、尙ほ足り申まじく候。即はち、土地には限りありて、死人には限りなき故とて、切りに杞憂を抱かる人も有之よしに候。一應は尤もの儀なれど、之は日に一寸づゝ伸る竹の子が遂に天を衝き破らんかと心配するの類にて、凡そ物には自然の制裁ありて左樣には一概に進步いたさぬものに候。左なくては、狐や狸が、人間を押のけて、世界中に蕃殖いたすべく候。墓地と同樣の譯にて、今こそ、累々たる石塔の日に增加するのみなれど、之も亦次第に無緣となりて、漸次に廢棄せられ候ものに候。其の眼前の證據は、今の寺々に於ても見え申候如し。當今共同墓地にて地坪を廣く取り、鐵柵をめぐらし、大理石にてちりばめ、齡ひは千年ならずとも、墳墓は萬々年迄と、趣構したる紀念も、家の三代續きて榮ゆるは至つて稀なるもの故、萬年たゝぬ中に構ひ手も無くなり、大抵は忘れられ、棄てられて、又々新らしき流行ッ子の墳墓として開掘せられ候ものに候。左すれば墓地が恐ろしく大きくなるとも左程に心配するにも及ばぬよながら、兎に角、現在の制度に一改良は施こさねばなるまじく候。西洋にては、グリンウード、セメトリー。日本にては本願寺の骨堂などに考へ合せ、地下に大室をつくり棚に一々札つきの骨箱を入れ置などの便法も有之候半歟なれ共、こゝに私の案ずる一方は、全たく別種のものに候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其の方、他ならず。凡そ、地主は、火葬にして其骨を、吾地内に埋葬するヿを許すの制度にいたし候ヿに候。尤とも、自分の好みにて、矢張り、寺もして共同墓地に埋葬するは自由に候。

斯しても、土地を賣つて他に轉ずる時は、改葬いたすべく、何も不都合は無之候。然し、少々の不便の存する所、即はち此方案の希望する所ろに候。之によつて、領土を愛好し、不動產を所望し、祖先に交通し、幽靈の觀念を一新するなど、種々心性上の利益を惹き起すが、一つの主意にて候。

而して、此の新案を實行するに付ての故障とては、別に有之間敷候。たゞ〳〵幕府時代、坊主が戸籍掛を爲て、キリスタンバテレンを防がんとせし習慣を繼續しての惰性的反對のみ

（二）。坊主と墓守の事　墓地は靈性的公園と致すべし、幽明二界を接續し、人の修養思道に便する幽邃高遠の逍遙場と致すべし、是れ文明が墓地に要求する所なれば、是迄の如く究屈にして事務的ならず、悲觀にして暗黒ならず、極めて極樂天國の淨地といたしたきヿに候。之に付て、世の坊主授產方に一案これあり候。

現在、寺に不仕多く、追々坊主は減るのみに候が、左りとて今すでに老さらばひたる貧道先生を、佛教の衰ろへたると同もに冷眼視するは、氣の毒に候。彼等が今ま困究するは、佛教の衰へたる故のみにはあらず、幕府が明治政府に改まりたる政治上の變化の故に候。彼等はもと一種の官務を勤めたる俗吏にて候。然るに、士族には、公債を與へ、幕府の役人も夫々の手當はあり乍ら、此の坊サン達斗りは其まゝに放擲いたせしヿ、明治政府の冷淡に有之、必竟、維新の際、神道復興して、佛教を抑さへたるの餘波にて候。

此の過去は暫らく問はず、目前、彼等の末路が不憫なるに付舊藩主を知事に用い、千代田の役人を東京府に使ひ、神主を國幣官幣の社に轉用せし例にならひ、坊主を墓地の管理人に用ゆるヿにいたしたく候。

但し墓地の管理人としての坊主は最早や、僧にては無之、宗教上には、全たく超然たるものに候。神主が國幣官幣の社に宮司たる時は、神道の信徒にては無く、單に宮の司さにて候其の如く坊サンと、たゞの墓守、即はち、ボスとなるヿにてボウズとボス、餘り異なるヿには無之候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

痴情偈語

A Bookist.（投）

○若き戀は花に宿る蜂の如し、久しく停ることなし。

○人は驚かされたる神なり、天上の性（たとへば戀の如き）を現すときには他人に知らるゝを忌む。

○死と雖も戀の不安を醫する能はず、手に手をとりて桂川の淵邊に臨みし梅川忠兵衛、の心の中にも打解ぬ謎は有けん

○戀は其證據を涙の中に求む。

○戀の餌食は涙なり、聖き悲もて飼はれざる戀は乳なき小兒の如く生くる能はず。

○嘗て君を笑はせし女と嘗て君を泣かせし女と孰れか深く君の記憶に殘れるや。

○アラス！、戀は泣くなり、泣きつゝ其鎖を結ぶなり。

○人は戀す、故に人の性はもと善なり。

やさしき殘酷は乙女ぞもてる。

○遺傳も進化も戀のひそめる心の奥まではえ犯さず、我は戀す、そこに我は二千年を若やげり。

○且戀し且悲しみうるものは幸なり 人はこの二つの光によらずんば眞理をみる能はず。（ユーゴー）

○戀は時に神よりも大なり。（ヤコブ、ベーナン）

○いかなる聖人君子の高き思想も我が愛する乙女の彼女の髮を飾れるリボンに就て談れるさゝやかなる不平にだに及ず

○非收絶艶美人涙、安解俊豪傑士憂。（中野逍遙）

○女の胸に休息所をもたざりし人に未來の眞意義の嘗て解かれしとありや。

○苦酸なる閲歴と、萬解の涙によりて漸くあがない得たる運命の意味を戀は一夜に敎ゆ。

○人の心には二つのうるはしき花あり。他人の爲に濺ぎし涙の雨によりて芽ぐみし者をヒューマニチーと言ひ、己の悲にうながされたる涙の雨に養はれしものを戀と言ふ、前なるは白き花なり、後なるは紅き花なり、ともに好き實を結ぶ

○美は喘ぎなり、戀は喘ぎなり。

○人を滿足せしむる詩は詩にあらず、人を滿足せしむる戀は戀にあらず。

○まことに自然の囁を聞かんとならば、先づ戀せよ。

○

宇宙と人生及靈魂に就て

（其一）

黑岩周六君演說

私は薄學短才の身を以て今日諸君の前に立つて自分の意見を述べることになりましたのは深く榮與に感じます。

講話に入ります前に前提として少し申置きたいことがございますが、私の今日の講話の題は宇宙と人生及靈魂に就てゞございます、此中の靈魂に就ての話は私先達て芝のユニテリアン會堂に於きまして述べました、それを此明治講話會の發起人巖本君からもう一度述べて呉れと云ふお話でございました、同じ説を再び繰返すと云ふことは何だか面白くないやうな考もございますけれども、併し靈魂の不滅と云ふことは私の信仰でございますので、私は二度も三度も未だ此上に繰返さなければならないと思つて居ります、或は私の體が朽ちて死ました所が、私はもう其自分の不滅の靈魂を以て墓の中からでも叫ぶ積りで居るのでございます、此通り我の靈魂は活きて居ると云ふことを世間へ示したい考でございますから、僅かの間に二度繰返す、三度繰返すと云ふことは勿論私は不當の事ではないと堅く信じて居ります。

けれども靈魂と云ひ宇宙と云ひ人生と云ふことは極めて空漠な問題でございまして吾々が實地に見たり聞たりするやうな事柄を以て說くことが出來ない、誠に分り悪い事でございます、それから第二には聞ても面白味もありませぬ、餘り詳しく述べまして果して私が諸君の心の中に入るやう述べ得るや否や、それも覺束なし、又諸君が御合點が參るまで聞てお居てになるかどうかそれも覺束なく、大抵或は私の聲が疲れるとか、諸君のお聞きなさる心が勞れるとか云ふやうな事のある頃まで、或は一時間か一時間半位ゐ述べませうと思ひます、別に此處まで述べなければならぬと云ふやうな譯でないのです。

それからもう一つ之を述べまするに就て私の立脚地を一つ申して置きたいと思ふ、何故に之を述べる迷信の爲に之を述べるか、或は其他に據ろがあつて述べるのかと申しますと、私はパンセーズムと云ふ一種の有神論の論者でございます、パンセーズムと申しますのは今の基督教などゝは少し違ひまして、基督教はモノセズム所謂一神教でございますが、パンセーズムと云ふのは基督教の一神論とは違ひます、基督教では神が宇宙を造つたと申しますが、パンセーズムの方では神が宇宙を造つたではない、天地に籠つて居る神と宇宙と同一であると云ふやうな議論でございます、是は元とごく早い所では伊太利の有名なるギヨルナルヂルなどが唱へまして、それから中古では和蘭のスピノザー、獨逸のゲーテーを始め、今の所では有名なる學者が信じて居ります、別に宗教として立つて居るのではございませぬ、唯信仰でございますけれども、此信仰は學術とも所謂サイエンスとも一致し、又哲學とも一致することが出來る、十九世紀の終りから二十世紀の入口である所の今の世に於て最も進歩したる一の學說に基いて居る、其學說は何かと申しますとモニズム、モニズムと云ふのは矢張り一つの主義と云ことを一元論と申します、尤も今までサイエンスの方ではマテリヤズムと申しましたのがマテリヤズムでは足りないと云ふので、モニズムと云ふ主張になつて居ります、それを哲學の方から言ひますと多くアテリヤスツクモニズム主觀的一元論と云ひ、サイエンスの方ではマテリヤスツクモニズム客觀的一元論と斯う申しますので、パンセーズムは兩方の一元論を根據として、宇宙人生一切を說明する一つの學說である、一つの信仰である、私は此信仰の上に立つて申しますので、或は其他の信仰を思つて居る方のお考と多少違ふ所もあるかも知れませぬが、それは致方がございませぬ。

それて此宇宙、人生、靈魂と云ふ此三つは別々の問題であるやうであるが、決して別々の問題ではない、佛教の方で申しますと是が過去、現在、未來と云ふ此三つでございまして、人間の過去を知るには宇宙を知らなければならない、現在を知るには人生を知らなければならぬ、未來を知るには靈魂を知らなければならない斯う云ふのでございます、宇宙人生靈魂と云ふは過去現在未來と云ふ所謂三界に涉つた事柄で、其一つを缺ては其他の物を知り悪くからう、どうしても三つ關聯して述べなければ本當の意見は述盡し難い、それて私が申しますのは第一に先

づ宇宙の方から申しますのです。

宇宙即ち人生の過去、宇宙と云ふのは支那の字引にありますのに、宇は場處の涯りなく廣いことを云ひ、宙は時の限りなく長いことを云ふとある、英語で言ひますタイムエンドスペース限りなき時と處を指して宇宙と云ひます、天から地から見渡す方面一切が一つの宇宙である、此宇宙と云ふものがどれ程廣いかと云ふことは勿論限りのあるのでないのですから言盡せませぬけれども、此宇宙が何物であるかと云ふことを考へるには、宇宙がどれ程廣いかと云ふことを一應考へて見なければならぬ、宇宙の廣さは何に依て考へるが一番早いかと云ふと、それは天文に依て考へるが一番早い、幾ら低い程度の學校に於きましても天文の大躰に就ては分つて居りますから私が言ふ迄もございませぬけれども、先づ分り易く宇宙と云ふものはどれ程廣いかと云ふことを申して見たい。

吾々の住む地球と云ふもの丶大きさから考へましても之を一週するのが凡そ四千哩、四千哩でありますからして一時間に二十哩走る今の日本の滊車の如きに乘つて一週しやうと思ひますと丁度五十日掛る、晝夜の別なく五十日間行くのですから地球の大きさがそれに依て大きいことが分りますが、地球から月まで行きまする道が凡そ此十倍とあります即ち一時間二十哩の滊車で絕間なく晝夜の別なく走りますると云ふと月まで行くのに五百日掛ります、それから月から太陽に行くにどれ程掛りますか凡そ其四百倍掛ります、さうすると今の滊車で彼此れ五百五十年ばかりになりませうかと思ひます、此處から太陽まで若し吾々が滊車に乘つて行く道があれば五百五十年掛る、さうしますると云ふと德川家康が東京へ城を築いた其當時太陽へ使を出したならば使は未だ途中に居てあつちへ行着かない、モウ五百年掛るのですから其人が死んで子、或は孫、孫の又孫と云ふやうな者が一生懸命滊車で走づて居るやうになる、隨分長い、長いのぢやない宇宙が廣いのであります、尙同じことですけれども言ふて見れば、神武天皇即位の時、日本の國家が開闢されたと云ふ位の時に使を出しましたにした所が、行つて歸つて行つて歸つてもう、一つ行着いて居るか行着いて居ない位のものでありますから、何しろ太陽までの長さと云ふものは恐ろしい長いものである、こんな廣いものである、是が宇宙の本當の廣さかと云ふとまだ／＼中々こんな事ではない、是より上の廣さは吾々が殆ど想像することは出來ない、汽車の速力に依て五百五十年掛ると云ふそれ位の長さですら想像にはなり兼ねます、けれどもそれよりもう一つ大きい所を心で想像して見るには是は汽車ぢやア間に合はない、汽車よりもう少し早いもの、それは何かと言ひますと太陽からして五百五十年も掛る所を僅か十分間で旅する飛脚がある、是は光線でございます、太陽が東の方へ少し現はれますと云ふと、此現れてより十分を經ぬ中、九分ばかりの中に光線は吾々に達するのでございます、實にどうも光線の速さと云ふものは非常なものであつて、之を數の上に積りますと云ふと、時計の一秒の間に凡そ十八萬六千哩走ると申しますが、十八萬六千哩走ると云ふと一分の間には千百六十萬哩、一時間に六億萬哩走ります、太陽から地球までの間が約一億萬哩――九千六百萬哩と云ひますから約一億萬哩であります、さうすると一時間の光線の早さは太陽まで三遍往復する、此樣な速い光線が一時間走つても二時間走つても一日走つても一月走つても、一年走つても未だ達しない處が宇宙にある、太陽に列つて居りまする地球であるとか月であるとか云ふ星は既に角、行星として人に知られて居る一番吾々に近い星まで太陽の光が達するのに丁度五年掛ります、一分間に一億萬哩も走る光線が一生懸命に走つて五年掛らなければ一番近い星へ行くことが出來ない實に驚くべき大きいものではないか、一番近い星でそれです、段々遠くなりましてどれ位掛るか分らない、其一番近いのはセントリーと云ふ處の西にあるアルハと云ふ星でございます、それより離れましてアルハトーリと云ふ星まで參りますと三十年掛る、太陽の光で三十年實に驚くべきでありますけれども、まだ吾々の眼に見える一番遠い星ではどれ位掛るか先づ彼此れ五百年掛らなければ太陽の光は達しない、吾々の眼即ち肉眼に見えて居るのでそれでございます、望遠鏡で見ると中々そんなものぢやないが肉眼に見える程の星でも五百年經つて光線の行着く遠い星がある、其星たるや今吾々が見ると天の彼方に輝いて居るが今から四百九十年ばかり前に消えて知れない、それは今から十年先になつて始めて其星の無くなつた事が分るので、五百年間旅して來なければ吾々に達せない、之を私共はどえらい廣い宇宙と考へますがまだ／＼天文學者說に依るとこんなものぢやアございませぬ。彼の有名なるヘンベルトが天文書に書てありますが、乃公がごく／＼正直に計算した所で、千五

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

百萬年經なければ光の達しない處に星があると云ふことは斷言することが出來る、斯う云ふことを書てある、是はいろ／＼な天文書にも引かれてありますから御存じの方は無論多いことてございませう、何しろ一萬年や二萬年てはない、千五百萬年經たなければ、彼の迅い光の達せないと云ふ處まてまだ宇宙が達して居る、實に人間の想像に入らない、何とも言ひ樣がない、所が是はまだ小さいものだ、矢張りハンペルトが言ふて居りますが、所謂無窮無限の大なる宇宙は此千五百萬年掛らなければ光が達しない所の距離よりも億々里兆々里、億倍兆倍、何とも彼とも言へない位ゐ廣いので其千五百萬年の距離の處は唯宇宙の一粒である、斯う云ふに書てある、是程驚くべきことはなからうと思ふ、いつ迄考へても果しがない先づ其樣な廣いもの、人間の心には到底入らない、私は此ハンペルトの言葉を實に宇宙の大を能く言現はした言葉であると感心して居りましたが、併し英吉利の哲學者のハミルトンと云ふ人が言ふてある言葉は尙驚く、ハミルトンはスペンサーのちよつと前に出た哲學者てミルなどゝ議論を上下して居る有名な人てありますが、其言葉に宇宙の大を想像しやうと思へば、自分の心に擴がるだけ廣きを考へて見て、千五百萬年とか云ふ其廣い心まて擴げて見て、其上て又其外を考へる外を考へて行詰つたならば其又外を考へる、それて行詰つたら又其外を考へて、遂に宇宙大なる果まて心が達するかと云ふにそれは達することは出來ない。其外を考へする時間が掛る、人間が人生僅かに五十年每日々々其外々々と考へても追付かない、どこ迄考へれば宜いかと云ふにハミルトン曰く、是は無窮の年限を考へなければ追付かない、一億年考へた所が追付きませぬ、十億年考へた所が追付きませぬ、數のある中考へても追付かない、私は是て諸君が宇宙と云ふものはどれ程廣いと云ふことを想像し得べきものであるかと云ふことを心の中に浮んて戴きたい、さうしますと宇宙の觀念、宇宙に對する吾々の驚くべき恐れ、或は尊敬或は敬畏と云ふやうな心が自ら起つて來る。

それて斯樣な大なる宇宙てありますが、宇宙が大きいと云ふことは決して私共自慢することぢやない、宇宙が多きいと云ふことは宇宙に比べて我が地球が小さいと云ふことになつて來る、宇宙は實に限りなく大きいのてありますが、人間の住む地球と云ふものは非常に小さいものになつて居る、さうして其地球の一部分に

住んて居る人間の有樣が又一層小さくなつて、人間の心に至ると、又小さくなる、無窮の年限考へても宇宙の中に擴がり得ない位の小さいものである、宇宙の大と云ふことは所謂人間の小さいと云ふことを知るので、宇宙の大に比して吾々が世界とする地球がどれ位の小さいものであるかと云ふことに是も亦一つ考へて戴きたい、是は獨逸の有名なる無神論者、日本て中江篤介君と名を等しくする議論家てあつたブヒチルと云ふ人が心と物質と云ふ本を今より三十四五年も前に著はしました、それは六十版から重ねまして殆ど世界の各國に行渡つた本てありますが、其本に言ふてありますのに、地球てあるとか太陽てあるとか何千萬里離れた所にある星てあるとか、其樣なものを引くるめて我の眼から觀察すると云ふと夕方に西に傾いた日が戶の隙間漏る其光に照されて疊の上の塵が大變に空中に浮んて居ることが分る、光線のさした處だけ塵の浮んて居るのが分る、詰り天體は此塵てある、大なる宇宙の光の中に地球だの何だのと云ふものが澤山浮て居るのは小さい浮塵が太陽の光に照されて人間の眼に見えるのと同じことだ、斯う云ふのてございます、成程先づ是位のものてある、或は此頃世界の迷悟と云ふものを現はしましたヘッケルなども、隙間漏る夕陽に照されて浮たる塵は吾々の住む地球の有樣に比すべきものだ、斯う云ふやうに言ふて居ります、兎にも角にも若し宇宙の大と云ふ所から見れば地球と云ふものは斯う云ふ小さいものと感ずるより外ないのてございます。

それて此大なる今申します宇宙と云ふものが唯大きい／＼と言つたゞけては何の意味もありませぬが、此宇宙の大きさと云ふものは唯大きいのぢやない、實に一つの不可思議を持つて居る、それは何かと申しますと廣さのどこ迄行つても涯りのないと云ふことゝ、それからして宇宙の時の長さの限りのないと云ふこと、所謂廣さの限りのないのは之を無限と云ひ、それから長さの限りのないと云ふことは無窮と云ふのてあります、是は成程無窮無限と吾々は宇宙を感ずるより外仕方がありませぬが、併し無窮無限と云ふことはどう云ふことてあるか、それは人間のどこ迄考へたとて分らない事てあるます、此頃或學者などは無窮無限と云ふことを說明するのに數字にあります $\frac{1}{3}$ と同じことだと云ふことてありますが、成程 $\frac{1}{3}$ はどこ迄割りましても 333……となつて果がありませぬが宇宙は是より

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

尙合點することが出來ない、一寸は物を三つに割つた一つだと云ふことは分けますけれども、宇宙の無窮無限ばかりはどうしても心に量ることは出來ない、若も此宇宙が無窮であるとすれば、合點のいかない問題が出て來るのは、此無窮無限なる廣い宇宙へイーサーと云ふものが充滿ちて居る。イーサーと云ふのは空氣の尙一層細かなやうな物でありまして、薄いことも限りがない輕いことも限りがないと云ふ一つの精氣でございます、若し宇宙のどこかに限りがないならば此精氣と云ふものは滔々として飛んで行つて仕舞ふ、けれども飛んで行かずに宇宙に充滿ちて居ると云ふのはどう云ふことであるか、コップの中であるとか何かの中であれば充ると云ふこともあるのであるが、限りのない中へ物が充ちて居る筈がない、煙の如く發散して仕舞ふ筈であるのにそれが無くなりもせず非常なる堅さを以て地球に詰つて居る、イーサーの詰つて居ることは非常なもので其堅さと云ふものも亦非常で、イーサーの一端を叩けば千萬里の先まで響くと云ふ堅いもので、こちらの端を動かせばこちらの端が動く、千里こつちを動かせば萬里先までも動くと云ふやうに、目がつんで細かくなつて居る、無線電信と云ふやうなものもそれが爲に發明せられる譯で、イーサーの片方を動かすと他の一端が向ふて感ずると云ふやうな事である、恰も蓋のある大きな鍋を拵えて、其中へぎし詰にして外へ出ないやうに圍つてあるやうに、限りのない宇宙が如何にして此イーサーを圍んで居るか、包んで居るか、是等の事に至つてはどうしても吾々は考へることの出來ないもので、此後人間の智識がどれ程進歩致しませうとも、無窮と云ふことゝ無限と云ふことはもう決して解けない問題である、それでありますから兎にも角にも宇宙なるものは小さい人間の智識に超えて居る、學者がどのやうなことを言つて威張つてもどうして宇宙の本體を了解すると云ふことは人間にはどうしても出來ない、時の長さを量り、其ものを了解すると云ふことは人間としては到底出來ない、宇宙なるものはもう何だか知らないが兎にも角にもどえらい大きなどえらい長いどえらい不思議なものである、此位ゐ不思議なものはない、是が宇宙に對する有形の判斷でございます。

宇宙の形の上から見ると此樣な斷定が下る、併し吾々のみならずパンセーズムを信ずる人が宇宙を信ずるのは形で信ずるのではない、形の外の又不思議なものが

ゐる、斯う云ふ大きいものでありまして其中には種々樣々のありと有ゆる違つた物がありまするが、其大なる宇宙がたつた一つの活きたる形を成して居ると云ふことは是は宇宙の心事とでも申しますか、此宇宙の形を離れて考へて貰はなければならない事だ、もうさう云ふ廣い宇宙でございますれど、どこからどこ迄も一つの關係が續いて居つて、例へて申しまするると云ふと屋根の上に一つの塵があつて風に吹かれて落ると斯う致しますと、それが其ごく僅かな風で、風が有るか無いか分らない位であるのに屋根の上の塵が落ちて來る、何故に此塵が落ちたか、斯う考へて見ると是は何でもございませぬ、宇宙と云ふどえらい大きなものゝ全體の力が一つの塵に加はつて居る、塵の落るのも風が吹いた故に落るので、風は何故に吹いたか、琉球の沖か呂宋の沖に低氣壓が現はれた爲に起つた、即ち屋根の上の一つの塵が落るのでさへ少くとも琉球あたりから來て居る、其琉球の低氣壓はどう云ふ譯で起つたかと言ふと、是は海から蒸發する水氣とか、それから天から照す所の太陽、即ち汽車に乘つて五百年掛る先にある太陽の光線等に關係して來る、即ち其原因は太陽まで行つて探して來なければならぬ、屋根の上から塵一つ落ちたのは一億萬里先にある太陽から關係して來て居る、即ち太陽が手を伸して屋根の上の塵を落したのだ。

そこでそれから太陽へ行つて調べたら其原因は知れるかと云ふと中々知れない、太陽がなぜそこにあるか、斯う考へて見ると、何億年前かに死んだる星と死んだる星とが衝突してちぎれ合つて出來たと云ふのが今の學說でございます、太陽が出來地球が出來たと云ふことに就ては、名高いケプレルのネプラハイボセス說などもありますが、此頃ではいろ〳〵に唱へるコンストラチインパクトの說に依りますと、或星と或星と衝突して出來たと云ふ私共の解する所ではそれが一番確かな說のやうに思つて居りますが、少くとも何億年前に此宇宙にあつた所の星が今は太陽と形の變つて居るものであらうと思ふ、さうすると矢張り其星が手を出して何億年前から今の屋根の上の一つの塵を動かして居る、其又星がどう云ふものから出來たかと申しますと數限りがない、どこ迄煎じ詰めて行つても限りがない、塵の動くのでも其原因から原因を尋ねて行けばどれ程廣くなつて行くか、どれ程長く掛つて行かなければならないか殆ど分らない。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

是は屋根の上の塵でありますから成程妙だと言ひますけれども、何千年何万年前に其原因があつたか殆ど分らない、私が此演壇に立つて居る事ですらも、私が此演壇に立つて諸君に向つて御辭義する、此御辭義は私がするのでありますけれども能く考へて見ると私の外に私の後から私に御辭義をさせるものがある、それは何かと申しますと二千三百年ばかり前に居た支那の孔子と云ふちやん〳〵坊主、此孔子の思想と云ふものが知らず識らず吾々に傳はつて禮義作法と云ふことになつて居る、禮義作法は吾々は今日改良したとか何とか言ふてすけれども、其元は二千年前の孔子から來て居る、支那と日本と何百里離れ、時代に於ては二千年と云ふ古い時代の人が、後の方から私の頭を突ついて御辭義をさせる、是が不思議な所で、此孔子の禮義作法はどこから出て來た、孔子は老子に學んだと云ひますから老子から出たとしても、其老子の學問は又其前から……其前のみならず其時代に亦通した世界の有ゆる範圍から養はれて居ると斯う致して見ますと、私の唯一つ御辭義することですら、もう幾千年來の關係が寄り〳〵て斯う云ふことになつて來て居る、それを見ると宇宙と云ふものから見れば、彼と我と種々様々の別々の物であるけれども大體に於て見る目には決して別々のものぢやアない、太陽の光が屋根の上の塵と關係があると同じやうなもので、黒岩周六なる一個人の思想と何千年昔の人の思想と同じ結り合ひて連環して居つて、どこが誰の領分と云つて限ることの出來ない思想の筋である。

それでありますから一つの宇宙と云ふものになれば決して宇宙の中に別々のものは無い、人間であらうが何であらうが宇宙の部分である、犬でも猫でも皆宇宙の一部分であつて、それで宇宙の大なる原因に支配されて種々様々に動いて居る、其論鋒から申しますと人間が食事をすると申しますけれども人間が食事をするのではない宇宙の一部分の人間と名のついたものが即ち宇宙の一部分が宇宙の一部分を食べて居ると斯う云ふことになる、人間とても宇宙であり、食べられる物も宇宙である、原因は同じ宇宙の大なる原因から來るのでありますから、宇宙を例へて申しますのに、丁度時の長さから言へば長き限りなき鎖のやうなもので、宇宙の廣さから言へば廣さ限りなき綱のやうなものである、綱と云ふものは横に擴がつて居るものだ、其綱と縦に繋がつて居る鎖と合せたやうな大なるものである、此全体を稱してインハリッと申します、其原因と結果の繋りは宇宙の全体に渉つて切間がない、乃ち鎖でありますからこちらのごく端の一つの輪を引張れば末から末まで、一方のごく端の輪まで影響が傳はつて來る、又千年萬年前に動かした一厘が千年萬年後の一厘を動かす、斯う云ふことになります。

宇宙は鎖綱の如く、原因結果の鎖綱が即ち宇宙である、私は曾て此ことを話す一例と云ふも大仰でありますが、一例の中の一端にもならうかと思つて或書物から引出した例話があるのですが、是は私は新聞にも書きましたし、又人にも話しましたが其話は斯ふ云ふ話、詰り一つの原因がどこ迄續いてどれ程大きな結果を來すか知れないと云ふ話、其大体を言ひますと例へば吾々人間が吾々に少しも關係のないものを想像して見ると何であらうかと申しますと先づ冲の石の如き物が人間にまるつきり關係のないものである、海の底にある潮が來ても顔を出さない石が有らうと無からうと少しも吾々に關係はない、而も其石が大きい石ならば或は船に突掛つて暗礁などゝ云ふ名をつけられるなんと云ふやうな人間に關係も出て來ますが、海底數千尋の深い處にあるもう眼に見えない程の小さい砂の一粒であつた日には、どうしやうが吾々人間に關係はない、所が昔この冲の底の一粒の砂が大變な野心を起してどうか人間の社會へ出て見たい、若し出來ることなら人間の社會を引繰返して見たい、尚出來るならば人間の最上の位置にまで行つて見たいと云ふ野心を起した、けれども其一粒の砂は自分で動くことは出來ない、海の底であるから近處を魚でも通ると其游ぐ鰭に觸れて少しくゆら〳〵と動く位の事しか出來ない、けれどもさう云ふ砂ですらも必ずしも人間世界を動かすことが出來ないとも限つたものぢやない、是が宇宙の原因結果の及ぼす大變な所で、斯う云ふ所を考へて御覽なさい、其砂の側に蛤が餌を漁つて居る、所がさう云ふ砂ですから餌と共に其砂を呑込んだ、そうすると砂が蛤の中へ入りますと丁度人間の眼の中に入つたやうて痛みを感ずる、蛤は痛みを感ずると眞珠液と云ふ汁を体から出しまして砂を包んで仕舞ふ、それが段々成長して眞珠になる、眞珠は人間の眼に入れても痛くないと申しますが、蛤の柔かい体の中にあつても痛くないやうな汁を蛤が分泌して、其一つの砂を包んで眞珠を作るのですから痛くないものになる斯うなつたとしますと砂が眞珠と云ふ人間に價のある物になつた、眞珠に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なりますれば是は態々海の底に眞珠を拾ひに行く位ですから人間に拾上げられる事が出て來る、此拾上げられた眞珠が若し非常な價があるものと致しますれば――實際眞珠は價があるのですが價あるものとすれば、其眞珠は多少の直打を以て人に買はれる、さうしますと元は一粒の砂であつたものが百圓とか五拾圓とか幾らかの恩を受ける人が出て來る、それで其買はれた眞珠はどうなりますか、眞珠の働きは種々樣々であります、けれども、或は皇帝の冠のとつ先へ輝かないとも限らない、さうすれば隨分砂一粒でも成程人間社會へ出て、人間社會を引繰返す力がある、大なる國の國王の冠へでも嵌められる日には此上もない人間の上位を占める、人間の中で最も高い地位を占めることが出來る、斯う考へて見ますと原因結果のそれからそれへ繫がつて行くと云ふとどこ迄繫がつて行くかも知れませぬ、吾々は人間として一個人でありますけれども、此一個人が今日爲す些細なる事柄が皆に於て限りなき原因から來て居るので後來に對しても亦どれ程大きい結果を及ぼすか是も量られない事でございます、僅かな砂の粒が人間の社會を動かすやうな工合に吾々一個人の今爲す事が、其結果はどこ迄及んで行くか無限なものでどこ迄でも及んで行くことが出來る、茲に於て先づ宇宙と云ふものは大なる原因結果の海であつて、其原因結果の赴くはどこ迄大くなるか、どれ程洪大なる事になるか、人間の力を以て測ることが出來ないと云ふことも是が一つでございます。

それから私は尙一歩を進めて、人間の學問にしろ何にしろ人間の智識と云ふものは、宇宙なるものを認めなければどうしても完全な智識にはならないと云ふことを一言申して置きたい、凡そ物には大極と小極とがありますので、大極と云ふのは此世界で言へば宇宙であります、小極と云ふのは之を反對に考へたもので、物を小さく割つて〳〵割詰めた所の原子が小極であります、小さい極點であります社會から申しますと人間の社會と云ふものは人間の大極であつて、一個人と云ふものが小極である、一個人と云ふ小極の働きは社會と云ふ大極から常に支配されて居る、小極の有樣を本當に觀察しやうと思へば大極の有樣を見なければならぬ、一個人を捕まへて其外の會社と云ふことを見ずに、一個人のみを見て居ると隨分人間と云ふものは不思議なものである。

時事

○雄辯の世再び來れり

時代一轉して、世は再たび演說時節となりたり。明治五六年より十三四年に至る、烈舌燄々の記臆も早や三十年以前となりたりしに、歷史は今や同一步趨を踏んで、再びヲレーションを歡迎すべく廻轉せり。昔しは曾て、ヘンリー、デモスゼチスを理想とせしが、今は寧ろカルビン、ルーテルの種たるなからん歟。何れにせよ、喃々たる冗舌を聞かずして天外落下の神叫を耳き、口より出でゝ空に飛ぶ風の音よりも、心より迸ばしつて胸を貫ぬく至誠の熱語に接せんとす。近來の大快事なり。

○雄辯の基礎

雄辯は確信の響き、至誠自から欺むかざるの發聲なり、假令ひ銅羅を叩き鈸を打つとも、一點自から疚しふする所ろあらば、遂に雄辯あるとを得ざる也。方今の世、世人が雄辯を聞

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かんヿに渴望し、之を聞きて恍惚たる所以の理、此を以て察すべし、而して漸やく雄辯其人の起るあらんとするを見るは就中祝賀すべし。豈にそれ單に口辯の爲とせんや。

○基督教公認

今にして基督教は實際の公認教となれり、四方到る所の官公立學校に於て、其の研究は自由にせられ、其の信仰は迫害せられざるのみならず、天下皆な之を歡迎せんとする也。此時に當つて傳教振作せずば、果して誰の罪ぞや。

○佛教一進化せり

佛教も亦た一變せり。教の變じたるにあらねど、方は悉く變じたり、昔日の頑冥不靈は、大方に跡を絶ち、其正純博通なるもの、其の寛弘文明なるもの、大に行はる。是れ固と反動の利に據ると雖ども、抑そも亦た青年有學の佛教者が奮興に由れり。

○神道界は奈何ん

掲り手をかざして望見す、神道界は奈何んと。抑そも、神道の純正宗教としての價値何程なるやは暫らく問はず、凡そ日本人種雄大自尊の氣慨は、多く之に淵源せざるヿなし。今もし森林中に之を發揮し、田舍間に之を成養し、ハイカラに對して蠻勇的に振興し、もつて神々しく、もつて嚴めしく、以てすが〳〵しく、何事の居しますかを知らずして而もよく莊烈たるヿを得るの神韻を寄與するあらば、勃興的大日本の青年は將に大に歡迎せんとする也。

○當年の宗教家懇談會

明治二十九年、耶佛神三道の有志發起して日本宗教家懇談會を開くや、其の開闢以來未曾有の事として、驚ろくもの、怒るもの、罵るもの、危ぶむもの、引も切らざりしが、今となりては一睡の夢の如し。今日に於て復た之を奇しむものはなかるべし。時勢の變、豈に絶偉ならずや。

○三教一家

惟ふに、神棚には神居まし、佛壇には佛居ますが如く、之よりして床の間に耶蘇居まし、以て、家庭宗教の調和を見んヿ、遠きにあらじ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

樂友社同人著

◎◎◎◎五版發賣

名媛唱歌

袖珍洋裝頗美本 實價金二十錢 郵稅不要

○華族女學校學監下田歌子女史序文
○女子英學塾長　津田梅子女史序文

容内曲歌

○神功皇后　○加賀千代
○松下禪師　○山内一豐妻
○紫式部　○清少納言　○春日局
○瀧口局　○大政所　○小督局
○女學生　○靜御前　○辨内侍

◎◎◎◎五版發賣

東京音樂學校講師高折周一先生作曲
音樂之友編輯主任今村九穗先生作歌

國民唱歌 海國男兒

一冊三錢　五十部以上二錢五厘　百部以上二錢　郵税一冊二錢五十部以下は不要

東京音樂學校講師前田久八先生作曲
東京音樂學校講師旗野士郎先生作歌

歴史唱歌 扇の的

◎◎◎◎目下製版中

發行所　東京市下谷區徒士町三丁目七十二番地　樂友社

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

顧問　新渡戸稻造
　　　津田梅子
　　　ミス、ベーコン(日本婦人著者)
編輯　ミス、ハーツホーン(日本と其國民著者)
　　　櫻井鷗村

英文新誌

毎月二回一日十五日發行

定價　一部金拾錢◉半年前金壹圓拾錢◉一年金武圓拾錢◉内國無部税

●●見本　部分拾錢にて一部送本す

◉英文新誌は純正なる英語智識の發達を企圖するに在り。記する處の英文は The English English なり。
◉英文新誌は世界文學中最も高尚幽玄なる英米文學を鼓吹して、國民の理想を進善せんとするものなり。
◉英文新誌は英語英文學を通じて、アングロサクソン人種の雄大なる精神を我邦に移植せんとするものなり。
◉英文新誌は斯界の名流を發成者とし其有益なる寄書を載せ、助言を仰ぐ。
◉英文新誌は熟練なる英語教師なり、該博なる英文學講師なり。
◉英文新誌は以て後進の良師たるべし、以て先進の益友たるべし。

發行所　東京市麴町區五番町十六番地　英文新誌社

ライオン歯磨慈善券附

袋入發賣廣告

ライオン歯磨　定價三錢の袋入裏面に慈善券あり此空袋を總ての慈善的事業へ寄附なさるゝ時は金錢の寄附と同一なるを以て例令一袋たりとも無益に棄る事なく都て此新法を利用せられん事を希ふ

ライオン歯磨　空袋の寄附を受けし人に對し本舖並に大阪支店其他各地販賣店にては一枚壹厘の割合にて御買取り申すべし

ライオン歯磨　販賣店なき地方は本舖又は大阪支店へ空袋を送付せらるべし直ちに代金返送す

ライオン歯磨　空袋寄附の全部にては郵税増加するを以て裏面のみ全部切取り御送付あらば大に郵税を省くの便あり

ライオン歯磨　慈善券發行は從來の外箱其他無益の空飾を省き之に充てたる者なれば其品質に於ては之れ迄賣りたると毫も異なる事なし

注意　慈善券の處の切取たる者は無効空袋の買取りは永久實行仕候事

ライオン歯磨　高評石鹼　發賣元　東京市神田區柳原川岸廿二番地　小林富次郎敬白　(特電電話浪花四九八番)

同關西發賣元　大阪市東區博勞町二丁目　小林支店　(特電話東一四九九番)

●●中央公論●●

青柳有美　文藝評論擔當

毎月一回發行一冊十二錢六冊郵税共七十一錢

東京市本郷區西片町十番地　反省社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十九號

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

（明治卅六年八月十日發行）

（毎月二回十日廿五日）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十九號
（明治卅六年八月十日發行）（毎月二回十日廿五日）
明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY